

第5回名桜文学賞受賞作品集



第五回 名桜文学賞受賞作品集

第五回名桜文学賞受賞作品集 目次

小説部門

最優秀賞 柚道を行く
奨励賞 つきのはな

平良 政勝／1
我如古莉子／30

詩部門

最優秀賞 該当作品なし
奨励賞 アルル
奨励賞 芭蕉布のうた
奨励賞 うめる
奨励賞 雨、上がる

二藤 瑠花／55
室園 美音／57
外田 さし／61
南野すみれ／65

短歌部門

最優秀賞 くすむ青
奨励賞 並行世界
奨励賞 勇み立つ子ら
奨励賞 生きる。

富井 嫉妬／67
花木 詩香／68
銘苅 愛子／69
ダークネスくわぶ／70

エッセイ部門

最優秀賞 言葉の前にあるもの
奨励賞 胡桃もちが教えてくれたこと

外田 さし／73
中里ちあき／79

俳句部門

最優秀賞

緑閃光

奨励賞

声許されず

奨励賞

赤い矜持

花本

詩香

85

琉歌部門

最優秀賞

該当作品なし

奨励賞

あさと愛子／89

奨励賞

久高友隆／90

奨励賞

前原武光／91

選評

小説部門

小嶋洋輔／93

詩部

西原裕美／103

短歌部門

久保まり子／106

エッセイ部門

小番達／109

俳句部門

おおしろ建／111

琉歌部門

波照間永吉／114

玉代勢章／97

赤星十四三／100

照屋理／117

表紙

『あけの海』

原画 デザイン
ステンドグラス製作

帆足デザイン研究所
沖縄ステンドグラス

小説部門

最優秀賞

杣道を行く

平良 政勝／1

奨励賞

つぎのはな

我如古莉子／30



*

*

小説部門

最優秀賞

仙道を行く

平良 政勝

春の陽の光が川面を赤色に染める頃、近所の河川敷にやって来た男は小学生の頃、自転車が無性に欲しかった。でも、夕日に照らされた川面の鏡に映る顔は、悲しいほど衰えていて、もう欲しいとも思わなかった。

その男の髪はすっかり白髪混じりになった独り身の北村道雄だ。

道雄の頬に春の爽やかな風が^{なぶ}颯と、川面に漣がたった。見慣れた土手に盛られた葉叢^{はむら}に立つと、透明なウイルスらがツワブキの花粉の香に紛れ込んでゆらゆらと漂っていた。道雄は黒マスクを外して、思いっきり息を胸奥まで呑み込むと爪先まで新鮮な酸素が染み渡った。

道雄は感染恐怖にさんざめく世間に、背中を向けた。

道雄はツワブキの綿毛が宙に舞い上がるのを見届け、ポカリと口を開けた。すると空から綿菓子のような白い雲がストンと落ちてきそうな感じだった。

黄昏時、暖かい川縁には、早咲きの緋寒桜の蕾が苦しくなるほど^{ひし}締めき、四方八方の鶏のもみじの手足のような小枝を空に向けていた。もう春の陽だまりの残滓はなく、宴の後の静寂が残っていた。

昨日の水曜日、退勤前に年甲斐もなく少し勇気を振り絞り、道雄は、一回りも若い上司のご機嫌を伺った。

「えつ、有給休暇？ もう桜も咲いているの？ 場所取り？ 頼んでないよ。春だからね、じゃあ、北村さん、飲み過ぎに注意だよ」

と、あざとく応えた。

道雄が大学を卒業した頃は、就職氷河期だった。道雄が就職に焦りがなかったと言えば嘘になるが、幸いに道雄の水は溶けて、地元の新聞社に運良く職を得た。両親は諸手を挙げて喜び、道雄はそれなりに頑張った甲斐もあって、真面目な働きぶりからほどほどの評価をもらい、営業部の係長になった。

道雄は出勤時刻の一時間前に自社に着くと、隣ビルの印刷工場に向かい、幾つもの工程を経て刷り上がった出来立ての料理のような暖かい新聞を誰よりも先に触れた。

今朝のトップニュースと社説のタイトルの斜め読み、ザーツと須らく切り貼りされた記事を拾い読みして、なるべく明るい話題を探した。

“埋め立てに裁判所の裁定”と印字された渾身のゴシック文字の帯が目飛び込んだ。道雄は思わず息を漏らし眉根を寄せた。

戦後、この島の米軍基地から派生する米兵の猥雑で、醜聞な事件が繰り返し起こり、事件事故の記事が掲載されない日は皆無だった。

島の歴史を顧みれば、焼野原の上に建てられた茅葺屋根の家屋にもブルドーザーが通り抜け、農地は滑走路に変わり果て、米国統治が始まった。その後、祖国復帰は果たしたものの、極東の要塞の島は本土の「捨て石」となり島ごとラップに包まれたまま米国のお土産物に成り果て、米軍は居座り続けている。

この地政学上の軍事の島の宿痾しやうあを誰が背負うのか、市井の人々にも、道雄にもその枷を担うことはあまりにも酷なことだ。そんな中で、島では青の珊瑚の海を人の小骨混じりの土砂で埋める新たな米軍基地の建設工事が始まっていた。報道によれば、土砂は、未だに浮かばれない屍が眠る島の南部の激戦地から運ばれているという。

島の過去の悲惨な戦争の歴史の轍を踏むことは二度とあってはならないという不文律がある。

この自明の理のため精一杯に基地建設に反対する人々は、警備員に排除されても「命が宝」と声を枯らして叫ぶ。一方で、基地建設工事に携わる労働者らは、生活のため、家族のためにとダンプを今日も動かし、土砂を搬入し、汗を流している。

どこからか持ち込まれた諍いさかいを巡り、誰もが重荷を背負い、それぞれの感情のまま突き進んでいる。折しも持ち込んだ不埒な輩は霞の雲の隙間から覗いている。

人は何でもかんでも善悪の区分、黒でなければ白という乱暴な論理で峻別したがるのはどうい

うことなのか道雄には理解できない。どうやら、人生にも勝ち負けがあるらしい。タワマンに住む人が勝ち組で、道雄のような安普請やすぶしんのアパートに住んでいる者は、負け組になるという。道雄の生活はかつがつでもなく生きていける。そんな、人の不幸は自らの肌身で感じ、戒めるのも自分自身だと、揺るぎない信念が道雄には流れている。ただ悲しいことに、世知辛くも人の心には必ず表裏があつて、それは、産んだ子供が突然死んでしまつて悲しむ女がいて、それを見ていた子供が産めない女が裏庭の陰で、いい気味だと心に囁くような、そんな不可解な深層心理も人にはある。道雄は、人の運命の妙に思いを馳せながら、たとえば化石になつても生きるしかないと思つた。

しかし、十把一絡げに人の心を分けるのも危険なことだ。ましてや人は雲霞うんかのごとく事物に潜む表裏の倫理を完全に理解することもできない。もちろん、道雄自身にもわからない。

今でこそ風まかせの柔い神経となつた道雄だったが、それこそ学生時代には、俠氣に昂ぶつて、それなりに社会の貧困と差別の歪な構造に疑念を抱き、時代遅れの学生運動に関わつた。いわゆる左派系のシンパに紛れて集会にも参加した。

社会の矛盾に焼石の礫つぶてを投げたが、まるで鉄壁に雛あられを放るような闘いに、刹那、虚しさだけしか残らなかつた。

身を捨てるほどの闘いがあるはずもなく、農家だつたこともあり、現金収入は乏しく、道雄は建設現場や引越し荷物の積み下ろしなど実入りのいいバイトに明け暮れた。現実には理屈よりも行動を優先しなければ生活は成り立たない。道雄の体力維持には、睡眠が欠かせない。教室でうた

た寝する道雄に“反戦”の飴は虚空の彼方に浮かんでいた。

ある日、道雄はアジビラを紙飛行機にして飛ばすと、滑空する紙切れは傾いでゴミ箱に漂着した。紙切れに魂はない。叫びと鳴咽だけの紙屑は、ゴミ箱に溢れ、後々、焼却される定めだ。本気で人の胸を打ち、闘いに駆り立てる確固たる論理はどこにも書かれてはいない。道雄の束の間の義侠心は消えた。

他方で、道雄は、やはりマスコミの力は絶大で、常に謙虚に権力に抗い、鷹揚に構えて社会に潜む所業を暴くのは新聞社の使命だと、逞しい思いに駆られた。そして運よく新聞社に就職できたのだから、一矢報いる機会があるのかもしれないと、仰々しい野心を抱いていた。でも、人生にドラスチックなドラマを期待してはいけなかった。

道雄の働き甲斐を支える理想と現実乖離していた。

明けても暮れても、くるくる回る独楽のように会社組織の営業のノルマに追われた。一縷の望みの春の定期異動は営業部内に留まり、記事に関わる部署へ異動は叶わず、人事が万事、道雄に一編の記事を書く機会は途切れた。それでも道雄は、常に何か新たなことを切り拓くためにも、足が木偶の坊になっても地道に歩き続けることが大事だと信じた。そして歩けば歩くほどに、道雄の社会に対する不定愁訴は、凡庸な生活の繰り返しの中で癒されていた。

ある夏の日、道雄は人並みの恋をした。

「行つてらっしゃい、気をつけてね」と毎日声をかける受付の女性に想いを寄せて打ち明けた。しかし道雄の恋はサイダーの泡のよう弾けた。彼女の吸い寄せられる笑顔は外向けの創られた微

笑みだった。創られた笑みに愛はなかった。

時の流れは素早い。

多くの同僚社員が社内で意気投合する中、同期の恋愛事情を語る同僚もすでに、管理職となつて、庭に花咲く家庭を築いていた。もし、道雄に適齢期があるとすれば、それはすでに消費期限が切れている納豆の豆のように発酵してていた。

いつの頃か、両親から好きな女性はいないのかと訊かれて、年甲斐もなく職場の食いしん坊そうな若い女性に声を掛け、食事に誘うと、セクハラだと上司に告げ口された。道雄に他意はなかったが、瞬時に上司に咎められた。その日のうちに道雄の恋らしきものは終焉し、家庭の日溜まりは消えた。道雄は金輪際、女性社員とは必要以上の会話をすべきではない、畢竟、異性を避けることを肝に命じた。その後、道雄の恋は、これが世の中、きっぱり諦めた。道雄はおぼつかない恋をした誤りを認めた。そして道雄は個々人の人生を狂わせるのは、ただただお金と妙齡の婦人の誘惑だけだと、恋愛もどきの苦しさを酒の酔いに任せて、邪心を抱いてはいけないと、アパートのミニマムな部屋でもはや、おじさんの恋は禁断の果実だと、自嘲し、疑心暗鬼の陥穽かむせいの中に落ちた。

明け方の風が冷たい朝、道雄は出勤すると印刷工場から十部ほどの刷り上がった新聞を社内のロゴマークが刺繍されたトートバッグに入れた。

道雄は新聞販売店を地域毎に限なく周り、販売店と読者の間にトラブルはないか、困りごとが

あればその相談と苦情を受け持った。

そこで、道雄は、苦しい思いを話す店主達の声を拾い、黒皮手帖に押し付けるように記した。しかし店主達の背中に映るのは、地区割り部数の目減りを余所目に、広告掲載案内の別刷りを差し込む姿だ。思わず道雄は紙媒体の未来はどこにあるのだろうか、ふと考えてはいけない苦悶に頭を抱えた。

昨今、怒濤の波のように電子化が進み、社会がデジタル化し、ペーパーレス化の時代を迎えて久しい。しかし歴史を刻んだ紙の文化は消滅することはない、言霊は先人から人の身体と心に染み込み、文字として残ると道雄は信じている。翻って、人はスマホ機器の冷たい画面の文字に飽き飽きして、太古の昔から愛用した紙を指の腹で触れてその暖かさを感じるような明日も来るだろうと、道雄は淡い夢を見ていた。

会社は浮世の風に乗りに、リサイクルを進め、持続可能な社会を目指す経営方針に、道雄は新聞紙の原料を考えることは禁忌だ。製紙会社から届く巻紙は、あらゆる灌木や喬木のその深い根っこまでも引き抜き、夥しい緑の森が消えていく代償の上に成り立っている。しかし仕事柄、古紙の原料になる新聞紙の行方を追い駆けてはいけないのだと、道雄は切ない気持ちになった。

道雄は自らの掌にうつすらと吸い付くインクの匂いを嗅いだ。

道雄は働いて、大根や醤油を買って、日々の糧を食い繋ぐ、当り障りのない生活を支える給金はコンピュータシステムに乗って誰かが入金してくれる。道雄は当然の対価だと思えばバチが当たると思っていた。心なしか、腐心のまま、勢い「会社をやめてしまえ」などと啖呵をきる勇氣

もなく、毎月大事な預金通帳を、愛読書を読み重ねるように食い入るように眺めた。だけど、幾ら擦っても数字の桁が増えることはなかった。

地球温暖化で極地の氷が溶け始めた。

それよりも何よりも人々にとつてもつと酷い喫緊の事象は、予想外のスピードでやってくる超高齢化した社会だ。老人だけがうろつく街を目前にして、道雄は老いる自分の姿を夢想すると、背筋に冷水が走った。

でも道雄にとつて、愁眉の急は温暖化でも少子高齢化でもない。印刷文字が消える世界だ。それは社会を混乱させ、どれほど畏怖な環境に貶めることになるのだろうか、まるで弱きもの生活から順に、何かを食い破るような音が肥大化しているようで、一瞬、道雄は血の気が引いた。

しかし道雄の田舎の浅学非才な両親でさえも認知症の予防にも欠かせないと、あえて新聞をよくなく愛読した。両親は戦争中に情報が昏_{くら}かった時代の名残なのかもしれないが、新聞に載った地域の情報に驚嘆し、嬉々としていた。

道雄の営業精神を支える拠り所は、紙面を広げる両親の老眼鏡に映る真実だ。そして、道雄はたとえ新聞が図書館や病院の片隅だけの存在になったとしても、活字に飢えた人がいる限り道雄の仕事が尽きることはないと感じた。

道雄にとつて、新聞は天からの護符だ。

ここきて、とにかく販売店は、後継がないのを理由に廃業したいと申し出る店主がいて、

その説得に難儀もしたが、やむを得ない場合は、社の方針に従い、道雄は近隣の販売店を統廃合することで、乗り切った。それでも最大の問題は、家計を圧迫する経済的理由から契約解除を申し出る読者の説得には無理があつた。

拒否する権利は常に読者にある。だから店主はいつも諦める。逆に執拗で強引な勧誘をする販売店があると、宗教の勧誘でもないのだから、そんな口さがない噂を払拭しなければならない。道雄は店主をやんわりと叱咤し、愚痴を訊いた。

夏の一日、道雄は自分が受け持つ販売店に出向き、いくつかの店舗のカウンターに用意した麦茶と菓子折を置いて、朝刊を配り終えたバイト従業員と高齢者の店主を労った。

営業成績が右肩上がりの血気盛んな頃、道雄は「どんなにいい記事でも、読まれなければただの紙屑だ」と、営業の努力を営業部長に歯嚙みして言うところ、当時の部長は厳しく「編集部の話だ」と睥睨する（ヒナシ）ように突っぱねた。道雄は反論の道もなく、直言し上司の反感を買った。

「読者を増やすには、自分の足で契約をとるしかないと思います。机に這い蹲（フミヅミ）するあなたに何がわかるのか？」と声を荒げた。

「余計なことは考えるな、北村君！ それぞれの持ち場で頑張つて、組織はあるのだ！」と、部長は一喝した。

道雄は言葉の接ぎ穂を失い、心根が折れた。

道雄は只管、納得もいかないまま嫌な役回りを引き受け、メディアの使命を完遂すべく業務命

令に従った。

道雄に驚愕の日が来た。

知らぬ間に、新聞料金が値上げされていた。さすがに、これには道雄はエツと背筋に汗が落ち、恐怖を感じた。営業職として失格だ。道雄は値上げの理由を店舗の店主に説明できるはずもなく、部長に訳を訊ねた。

呆れた部長は、一年前から会社の方針を会議で伝え、すでに、各販売店にも親書で、お知らせして、丁寧に説明を繰り返したと。

「いい加減にしろ！ 北村君！」と部長から叱責の言葉を浴びせられた。

「ええ！ ああ！」と、道雄は呻き声しか出なかった。

道雄は、まるで沖に流されたブイのようにプカプカと浮いていた。

道雄は、孤塁を守り続けていた果ての無知に、背中を曲げ、頭を掻きむしった。

外回りの自分だけが知らなかったとは、恥の極みだ。

「いつの間にか、何てことだ……」と、道雄の小さな沽券は零落した。

部下なし、ノルマなしの閑職の係長の宿命かと、道雄は自分を責めた。自分の存在すらもみつともないと思った。急に逃げ出したい気分になり、社内の胡乱な衆目を集めた瞬間、二階の窓から飛び降りたい衝動に駆られた。

道雄は決してサボっていたわけでもないのに、勤労意欲を一気に失い、溜息の息継ぎもできず胸は苦しくなった。

「値上げ」とは、恐ろしい庶民の敵の言葉だ。

その意図する会社の理屈や注釈は、所詮、言い訳に変わりはない。

道雄が茫然自失していると、部内の電話がなり響き、「北村さん、苦情の電話みたいよ。よろしくねえ」と調子よく、弾む声でした。

道雄は、落胆する違もなく、雨模様の曇り空の外に出ると、ポツリポツリと落ちてきた雨の雫で頬の涙も一緒に流れた。

街はすっかり夕暮れのしじまに包まれていた。

苦情の主は、販売店の店主に向かって、値上げの理由を訊くこともなく、もう入れるなど、口角を飛ばしていた。とりわけ政治に関心を持つ熟練読者の自己主張には頑なものがあり、簡単に論^{あげつ}うことはできない。男の振る舞いは、論客らしく、その果てに中立公正の新聞に政治信条まで追及していた。

「お宅の記事はおかしい。政府に批判的な記事ばかりだ、誰かの片棒か？ ましなものがない、ぶれているね」と訝しがる。その読者の声にいちいち「ごもつともです。参考にしていただきませう。ああ、そうですね。担当の者に伝えます」と呪文のように道雄は苦言を述べる相手に相槌を打ち続け、時に乾いた声は愛想笑いに変わった。

最近では、道雄の営業努力とは裏腹に、契約解除の家庭が増え続けていた。そんなことにあまり危機感を感じていない店主もいる。

そんな状況だからこそ道雄は個人情報壁をギリギリのところまで無視して、軒先のインターホンをそつと押した。けんもほろろの家ばかりだが、何とか舌先三寸で説き伏せ、一軒でも多くの契約を取り戻すことに力を添えたが、焼け石に水のような状況だった。

今は、紙だらけになるポスティングさえも読者は不満を持っている。『セールスお断り』の門扉の文字を見逃すと酷い目にあつた。

ある曇天の空の日、道雄は会社の広告勧誘の紙切れをポスティングして、ひどく怒鳴られた。突然、あるやもめ暮らしの老人が玄関から飛び出し、「新聞は図書館で読むものだ、今時、ネットで情報に入る。二度とチラシなんか入れるな!」と、爺むさい顔をなお陰気に曇らせた。ところが、道雄が平身低頭に謝ると、老人は中に入って、お茶でもどうかと言う。丁度昼時だったこともあって、老人は道雄を引き止めた。一心で昼飯を食べていきなさい、と息子に対するみたいと言う。道雄は足を止め、お茶を啜り、非礼を詫言した。

また、ある夏日の夕刻、犬小屋のない白い壁の邸宅の郵便ポストを覗くと、笑みを浮かべた女が出て、妖艶な手綱で招き入れようとしている。品定めするような女の眼差しは尖っている。道雄は柔らかな面差しを向けた。小さなマシユマロのような腹を抑え、鼻に垂れた汗の雫を拭いた。いかにも不用心な面立ちの道雄は、警戒されることはなかったけれども、怪しい仕草をする女豹のようなご婦人から、後ずさりして、そそくさと逃げた。

道雄は勧誘に疲れ果てた。胸がクキンと痛む。もう飼い主のない犬のようにウロウロすることは止めよう、道雄はあてのない執拗な心は悪の権化なのかもしれないと思った。

部長から引導を渡され、浮いていた道雄は、自分には営業にさえも向かないのか、どこにも行き場所がなくては、会社のお荷物になるだけだと、思い始めた。

しかし組織に抗う力も熾火おきびのような燈に変わっている。今は、与えられた仕事を続けるしかない。たとえ報われなくても、生活さえできればそれでいいのだと、道雄の思いは巡った。気づけば道雄の未来への雪解け水は、凡庸な人生のストーリーの流れを創っていた。

春の霞がこもるありふれた朝に、社内の人事異動が公表された。

道雄はもう内示を見ることはなかった。

今や、働き方改革と名の下に、会社は無駄な事業を見切り、人員を省くことを考える。機械化やコンピュータ化が推進され、残業する人は嫌われた。そして営業部はネット契約の啓蒙で縮小された。

ふと、道雄は窓辺で佇む部長を見遣ると、部長はパーテーションの陰で涙をすすっていた。もうこれ以上の出世を求めることはしないと諦めたのか、背中に輝きはなかった。

道雄は今更ながら動揺することもなく、恬淡としていた。

道雄は直接の訪問契約は禁忌となった今や、契約維持に欠かせないのは、地域の話題を提供する自治会長と仲良くなることだ。これが信頼の早道だった。道雄のような中年のおっとりした風貌は、地域に溶け込んでいる。道雄はあからさまに他社の悪口を言葉では言わないが、地域の祭りや行事に参加し、やんわりと他の新聞会社が記事しないことを取り上げていることを披露した。

しかし一番の店主の悩みは、重圧な紙を運搬する配達員の確保だ。昔のような新聞を配る勤労学生は皆無に等しく、定年者の健康維持のためと謳って、シルバー人材センターに駆け込むこともあったが、やはり配り手はいない。

かつて、道雄は小学生の頃に自転車が好きだと我儘を両親に言っていると、母は稲束で道雄の尻を叩いた。

道雄は、現金が家にはないことを知ると、小遣いを稼ぐため、初めて新聞配達をしようと決めた。この当時から、一軒一軒と配った記憶は、大人であつても子供であつても関係なく責任重大なものだと思つた。ものを運ぶことは、尊いことだと道雄は学んだ。

しかし昔の真摯な新聞少年は、すでに過去の遺物の物語だ。

人は思うほど、毎日歩けるほど元気でもない、バイクや自転車の事故もある。配達ルートを間違えて、遅配や不着は、信用をすぐに失う。道雄はうんざりするほどの苦情を浴びた。

一人暮らしになって、繰り返し思った。「もうこの辺でいいのかなあ」と、今や腰の痛みは、早期退職の理由になるかもしれないと、道雄にまた迷いが過ぎつた。しかしそのままぼんやり暮らして、終末を迎えることも味気ないと、辞する決意は固まらない。何度も反駁する心の裡には、二度と新聞配達などやるものかと、きつぱりと手打ちする道雄がいた。

道雄の心は矛盾に満ち溢れていた。

迷いの夜、部屋に射し込む星の光に託して、道雄は気を取り直した。会社は飲酒運転さえなければ、懲戒解雇もないし退職金も期待できる。居心地はそんなに悪いものでもない。そんな

ご時世もあつてか、えい、ままよ、優柔不斷のまま、辞することもなく仕事を続けた。

道雄は休みに日なるといっても、どこか遠くの街に出かけた。何気なく違う景色をぼんやり見遣るのは道雄の唯一の楽しみだった。職業柄か手垢の地図帳は道雄の愛読書で、誰も知らない人達が暮らす街を彷徨すると、とても落ち着いた。そこから中に生活があり、どこまでも広がる茫漠とした自然の景色があつた。

ある日曜日、道雄は左手で大腿筋を軽く叩きながらそろそろと起き上がった。

閑居の独り身は、身体を壊すらしい。地図帳を捲ることに集中すると、ここにはいけないと思ひ込む、やがてなんだか頭がおかしくなつて、意識的に用事もないのに外に出る習癖が身についていた。

道雄の鬱病予防の散歩、それは意図的に、しかも無法図に心ここにあらずして、ただぶらりと見知ら停留所でバスを捨て、他人の家並みからはみ出た樹木や園庭の花々を眺めた。どこにでもある日常に出会うことに喜びを感じた。どうせ、宅配も来ないし、訪ねて来る人もいない自分のアパートに閉じこもると徐々に気持ちが萎えていくのは至極当然だ。

ただ、見知らぬ街に歩を進めていくと、太陽の陽射しに影が負けて、背中に一雫の汗が溜まると、時に恐ろしい衝動にかられることもあつた。

あれはいつの日の散歩だったか、いつしか見知らぬ奥深い喬木の森陰に入り込み、そのまま誰にも発見されることもなく、朽ち果てて、蒸発してもおかしくない気持ちになつた。

見知らぬ森の中には、道雄の魂の旅の始まりを導く魔物が潜んでいて、このものは神の教えに

背き、あの世の川の袂まで手を引き、淀んだ川を渡り、永遠の寢床に導いた。

引き込まれるまま、寢床に横たわると、道雄は訳もなく、暗渠な井戸の底に沈む文鎮が鳩尾みずちを抑えているような気分になった。

道雄はハッと真夜中に目を覚まし、自分を取り戻した。

起き上がり、部屋の明かり取りの窓を見つめた。まだ生きている。

今夜も死なないで済んだと、額に付いた二粒の汗を手の甲で拭った。

道雄は思う、世の女性は一芸に秀でるか、資産持ちが好きらしく、気が優しくて温和な人柄は、二の次のようだった。道雄は、優しさだけは秀でている。その点、道雄は愛されるべき、何の取り柄もないがおそらく死ぬまでいい人だ。

道雄は社内恋愛を諦めた頃、同僚の紹介で女性と食事をする機会を得たが、悉く相手にやんわりと交際を断られた。道雄は礼儀としてその理由をあえて訊かなかった。

会社の名刺を出した途端に、顔を突きわせると、部署からして、やっぱりただの新聞配達人だと、ある女史は、黙ってトイレの陰で欠伸を堪えていた。

最後にデートした女性から「つまらない人だった。会社は立派だけど、確かにね、仕事に貴賤もないけど、何だか面白みもないし、いまいち暗かった、だって、印刷の匂いがした」と、口さがない女子社員から仄聞いた途端に、道雄は胸を射抜かれた。道雄は、照明器具でもあるまいし、明るければ良いってもんじゃないのになあと、独り言ちて、恋の終わりを予感した。

程なく断られたその日、道雄は鏡を見た。確かに、無趣味で独り酒を嗜む男に惚れるほど、酔狂な女がいるはずもなく、だからと言って、飲み屋の女に惚れ込むこともなかった。もし財産さえあれば、それほどまでに落ち込むこともなく人間的な魅力の欠点は補えることができるかもしれない。でもそんな成れの果てに異性と交わることを是としない粹筋に拘泥した。それが道雄の人生の選択だった。

道雄は人として、月並みの生活を送り、新聞を糧に何とか給金を得て、生きてきた。

晴れの日には、露草の香りが漂い、雨の日にも雨粒に暖かさがこもる、そんな暖かさが残る金曜日に道雄は有給休暇を取った。

上司の上目遣いにも慣れた。いつもの河川敷の蒼い草叢に座ると、背中越しに自転車に乗った女子二人組が、何が可笑しいのかキヤーキヤーと言いながら首を反らせながら風に向かって笑っていた。

小春日和有給休暇はありがたい。寒さが緩み、斜めから陽射しが身体を差し込んだ。

道雄はいつものように朝刊と地図帳を詰め込み、相棒の茶けたトートバッグを擡げて、コンビニで日本酒のカップ酒二本と惣菜の焼ハムを仕込んで、昼間の公園のベンチに陣取り、佇んでいた。透明な液は、一気に心地よく臓腑に染透り、身体中が熱く広がってきた。

微睡みながら、道雄は、所在無げに公園のブランコに揺れる幼子と、幼子の傍らで見守る母親の背中を眺めていた。

夢を見るように顔を空に向けて暫く瞑目していると、風が止まった。

親子連れの眺めは、郷愁を誘い、田舎の両親を思い出す。でももう田舎の両親は鬼籍に入り、実家の屋敷と田畑は、人手に渡っていた。唯一の兄弟の三つ年上の兄は、両親を弔った二ヶ月後、若年性の認知症を発症し、専門の施設に入所していた。道雄はここ数年兄に会っていない。会っても自分のことが分からないし、悲しくなるだけだ。だから、道雄は施設に行くことをいつも躊躇った。

道雄は、兄の脳の高馬のタンパク質が溶け始めて、もはや精神の寛解を期待できない以上、このまま会わないで、心の痛みや悲しみを忘れ去る方がいいと思った。しかし年嵩もそれほど離れていない兄に対して、心が病んでいるのは道雄自身ではないかと、道雄は情けなく自分の身勝手さを恥ずかしく思った。

ふと、道雄は日焼けした兄の顔を思い浮かべると、懐かしみに、目のきわに涙が溜まった。

兄は嫁さんも来ない田舎で最後まで両親の面倒を見ていた。最後まで何処にもいかないで、進学も諦めて、欲しいものも買わないで、田畑を最後まで守っていた。今頃、園芸療法とかやらで、得意な野菜作りを施設でやっているのだろうか、蓄えた口髭はもう真っ白くなっているのだろうか、なあと、道雄は感慨に耽った。

道雄にあの頃の重苦しい記憶が蘇り、兄の恩義に報いることができずに、自責の念に駆られていたが、これから誰もが迎える確信の老後に一抹の不安は隠せない。目の前の公園のベンチに背中を丸めて座っているのは瘦せた老人だけだ。兄も道雄もいずれ、そうなる日が来る。

兄は施設に入居してから、人手に渡った田畑のことを気にかけていた。両親の元に何度も帰

ろうと、施設の生垣の柵を超えて脱出を図った。施設を抜け出したものの、敢え無く元に戻ると、兄自身もどこに行きたかったかも忘れていたらしい。

故郷には両親の夫婦墓が残っていた。

あれは、陽の光が憎いほど暑い、蟬が五月蠅く鳴き出した夏の日の出来事だった。

突然、父親が田んぼの真ん中で前のめり倒れ、泥の土に顔を埋めた。兄は泥の中に跪き、父を引吊り起こした。

兄の身体中から噴出す汗は、真っ赤な涙に変わっていた。すぐに診療所で心臓マッサージを施し、街の病院に運んだ。

父は頑強だった。父は一命を取り留めた。

父が泥田から生還した翌々日、父は何ともない顔をして病室で昨日の新聞を読んでいた。道雄は今朝の朝刊を父に渡した。「道雄、お前が書いた記事はどれだ？」と父が言う。道雄は、「今朝の分にはないよ」、「そうかあ」と父が頷くと、道雄は寂しくなった。

そんな時でも兄は、父が顔を埋めた田んぼを耕し続けていた。小麦色に輝く稲穂が一面に広がり、稲の花の残り香は虫たちの嗅覚を擽っていた。稲穂の先に兄がいた。

兄は、両親が亡くなってからも何かに取り憑かれたように鎌を握っていた。

道雄が兄の異変を感じたのは、母と父の遺骨を墓に納めた日だった。

両親の葬儀の日、兄の瞳は潤みの中に安堵の優しさが溢れているように、道雄は感じた。

兄の涙には一筋の微笑が顔筋に零れていた。

道雄は兄の顔の緩みに、不思議な違和感を感じた。

そこに死を訳もなく^{（じこほ）}寿ぐような不謹慎な兄がいた。

「二人揃って逝くなんて、天命だよ、道雄」と、兄が囁いた。

両親の棚田を引き継ぐものは兄だと、決めつけていた道雄だったが、思えば、その時は気づかなかったが、迂闊だった。兄に何らかの病状の兆候が出ていたのかもしれない。

両親は一変に、揃って二つの胴体が折り重なり倒れていた。それは大きく紙面を飾るような不審な死だった。

道雄はその時間、新聞販売店巡りをしていた。会社に戻ると兄から連絡があった。遺体を発見したのは田舎の新聞配達員だった。実家に前日分の新聞が郵便受けの投函口から食み出ていることから、配達員は異変を感じて、施錠のない玄関から三和土に踏み込むと、すでに散乱している台所に血の跡があった。

二人は折り重なるように倒れていた。

兄もいない束の間の出来事だった。

警察の現場検証に立ち会った兄は時折、奇妙な受け答えをした。警察もしどろもどろの兄の返事に埒があかず、何の確証もないまま時間だけが過ぎた。

検視の結果、警察の見立ては、母が脳溢血で倒れ、驚嘆した父は母を助けようとして、思いっきり揺り動かした。息がない、慌て狂った父は、持病の心臓疾患が突発した。台所に、大根を切

る母の節くれた手に、包丁が握られていた。出血は、おそらく母が握っていた包丁が偶発的に父の右腕の動脈に打つかったものだと思われた。不遇と不幸が重なる哀れな写真だけが残った。

警察の検分には、恨む誰かが殺害したとか、そんなことも視野に入れたらしいが、結局、二人揃ったの明らかな病死だと、法医学解剖の判定が下り、犯罪性はなかった。

道雄は、警察から差し出された一枚の写真を両手で握りしめた。毎日見る新聞の三面記事にも載せてはいけぬ光景があった。

死後、経った二日で、ネズミか、小動物の滑った足跡が二人の顔に残り、蟻が二人の脇から歩いていった。大根は転がって、萎んだまま黙っていた。

道雄は、兄と一緒に住んでいると思っていたが、丸二日の間、どこで何をしていたのか、兄に何を訊いても覚えはない。

「兄さん、どうして、家にいなかったの？」

「田んぼの草取りをしていただけだよ、道雄」

と、兄は真顔で言う。

道雄は、兄の異変を誰彼ともなく訊ねると、近隣の飲み屋の女のところにいたと言う、それもまた、兄の病状の兆候だった。一人で徘徊する時、赤い提灯を目指して歩き出す。飲み屋のママさん曰く、尿意を催すことがなく、店はアンモニア臭で満たされ、迷惑だったと、おそらく排泄も忘れてしまったのだろう。

これからの大きな問題は事故だ。いつしか車に轢かれるかもしれない、もしかして他人を傷つ

けるかもしれない。道雄は危険を感じた。

両親の葬儀は、身内だけで済ました。そこで、野辺送りに集まった係累のない近隣の人の囁く声を拾うと、骸を抱く兄が白木の箱を弁当箱みたいだなと言っている。道雄は空かさず、疲れているだけだと兄を庇った。

道雄は、兄が寒さや食事を忘れ、ふらつき歩くことを慮り、村役場の福祉課の職員と相談し、街の専門の病院を訪ねた。

道雄は兄の病状の進行も治療薬も知る術もなく、医師から言われたまま、日常生活に耐えられないほどの重い確定診断書をもらった。そして両親の残した屋敷と田畑を手放し、現金に換え、兄を専門の施設に託した。

樹々の葉緑に囲まれた施設に入った兄は新しい居場所に戸惑いながらも、柳の下で鮒が泳ぐビオトープを眺めていた。

道雄は兄に向かって手を振ると、兄は嗤っていた。

嗤う兄の姿に、道雄にとてつもない愛おしさが胸に迫った。

「道雄、最近、夕刊入ってないけど、配り忘れたのか？」

と、兄が督促する。

「兄さん、今日は、夕刊はお休みだよ」と道雄は嘘をつく。

「そうか、配り忘れると、母さんにまた怒られるぞ」

と屈託もなく兄が声を上げる。

「わかったよ、気をつけるね」と、道雄は新聞を届ける約束をした。

「それはそうと、道雄、自転車は買ってもらったのか？」

と、心配する兄がいた。

訊かれた道雄は宥めるように応えた。

「まだ、買ってないけど……もう欲しくないよ、兄さん」

「今年は豊作だ、ツバメが仰山巢を作っている。最新型の自転車を買ってやるからな、道雄！」と、目を瞬き道雄の肩を叩いた。

「ありがとう、兄さん」

道雄は、兄の子供になった。

あれほど母に縋った自転車を、兄は気にかけていた。道雄は兄の自慢顔を横目に、嬉しくて、切なくて、涙を堪えた。

道雄が欲しかった自転車。兄は愚にもつかない遠い昔の記憶を鮮明に覚えていた。

ある日の事、いつものように道雄は「所用で明日はお休みします」と上司に告げると、道雄の期待通り、「いいよ、在宅勤務にしても、今の時期は、八重桜の枝ぶりもなかなか見事なものになっているしね」と、もう来ないでもいいよと言いたそうな軽々な返事だった。

翌日、道雄は何の脈絡もなく、バスを乗り継ぎ、あまり人気のない街に向かっていった。

バスは湾曲した下り坂に差し掛かり、背後に新緑が迫ると、道雄はバスを捨てた。

川の匂いが鼻を突いた。昨夜の雨で水嵩が上がったのだろうか、渦が川の流れに従って、形を変え、消えてはまた現れていた。道雄は橋の袂で、腰をおろし、気紛れな流れの渦に見入った。すると、道雄にある記憶が蘇った。

小さい頃に、道雄の家を襲った台風だ。

実家は無事だったが、田んぼに注ぐ清らかな川は濁んだ早瀬に一変していた。

あの時、川には色々なものが浮いていた。見たこともない奇妙な金属片も色形の悪い動物の死骸も何でも沈んでいた。何でも捨てる下界の下流は庶民の生活で溢れていた。

道雄は川の流れに身を任せると、飼い主のいない猫のように、どうにもならない気分になった。そしてついつい、川を離れ、林の中の杣道に入り込んでいた。

道雄は、どうやら道に迷ったようだった。

方角を間違えるはずはないと、道雄は後ろを振り返ると、子供のサイズの靴跡が残っていた。

道雄は地図を広げた。

元来、磁石の方角を認知する道雄の感覚機能の羅針盤に多少のズレが生じた。道雄の羅針盤はくるくると回り始めると、道雄の頭もふらふらと揺れた。すると林の奥から届く、瞬く眩しい光が目突き刺さった。

秋の日の空は澄んで、チヨロチヨロと流れる川の水音は、生活の匂いがした。道雄には、街の

風景もいつもと違って新鮮に映っていたが、行き交う人たちに会ったたびに、ジロジロと睨まれているような感じを覚えた。この付近の柳並木には見覚えがある。

ふと、道雄は川面を覗き込んだ。川の上流からゆつくりと鈍色の絨毯のような敷物が流れてきた。敷物はそのまま、流れに逆らわずに、道雄に向かってきた。よく見ると、新聞紙だ。紙は藻のついた底石に打つかり、河原の石積みでジタバタと音を立てた。水に浸かった新聞の帯の活字も穢れて、汚くなっている。

水の音が這い寄ってくると、突然、胴間声が上がってきた。

「そこのお前！ 今、ゴミを捨てただろう？ お前はどこの子だ？」
そこに見知らぬお爺さんが立っていた。

すると、お爺さんはいきなり道雄の頭をポカンと拳骨で叩いた。

「何すんだ！」と、道雄は思わず叫んだ。

「子供のくせに、学校はどうした？」と、爺さんは訝りながら道雄を追っ払った。

道雄は、この付近のお目付け役らしいお爺さんから後退りして、逃げるように走り出すと、斜向かい側の堤に黒い半ズボンを穿いた男の子と大人の女が立ち竦んでいるのが見えた。

女は男の子の腕を掴み、叱りつけている様子だった。

道雄は瞬間、目が眩んだ。「あれは、お母さんじゃないか？」と、道雄は、自身の胴体をあちらこちらと触れ、膝を落とすと眼前の光景が迫ってきた。

「ああ！」と、ポカンと開いた道雄の口から大きな息が漏れた。

貧しいという金銭感覚を感じた子どもは自ら稼ぎ、あるいは換金できるものがないかと、あらゆる場所を探し求める、これは誰にでもある子どもの生きる知恵だ。

稲作と売り物にならない蔬菜^{そさい}だけで暮らす北村家の家庭は困窮していた。貧しさを一時的に断ち切るために父は心臓を悪くするぐらい酒を煽ることもあった。

それでも両親と兄は、稲作りと芋畑の耕作に汗を絞り出した。兄はまだ中学生だった。その中で、唯一の現金収入は母の、週三日の農協でのレジ打ちの仕事だけだった。

今思えば、道雄の両親は、二人の子供を育てるのに死に物狂いだった。そんな稲作農家に筆筭もなく、現金があるわけがない。

道雄は一人で田んぼの畦道の側溝で売り物になりそうな尾鰭の綺麗な闘魚を探して、顎を泥につけて掬い出した。

小遣いが欲しかった道雄は、母に内緒で新聞配達のアパートをした。夕刊を五十一部配るノルマが小学生に課せられた。販売店の店主は、親が認めたものか、訊くこともなかったが、さすがにそこには大人と大人の約束があった。

道雄は友達が持っている自転車欲しかっただけの新聞配達だ。

新聞配達の日、配ったはずの新聞が一部余っていた。確かに店主と一緒に数えた五十一部を持っていったのだから余るはずはないと、何度もかぶりを振った。

道雄は一部の重みに恐怖を感じた。

道雄は途方に暮れて、誰もいないかどうか辺りを窺い、目線を左右前後に回しながら、溜まる涙の雫と一緒に、川に新聞を放り捨てた。その瞬間、道雄の右腕を掴み「捨てるな！」と、背中越しに怒り声が落ちた。

放られた新聞は、そろりと流れ、下流の尖った石灰岩に引つ掛かりパタパタと川面を叩きつけた。

道雄は悄然として、後ろを振り向くと、母が腕組みをして睨んでいた。

母は、仕事を早めの切り上げ、道雄の後を追って来ていた。

新聞を捨てた道雄は、何で母さんがいるのか分からないまま、思わず振り向きざまに踏鞴たたらを踏んだ。

道雄は子供ながらに自分の人生はもう長くないような顔になると、その途端に母は、「道雄、配り忘れた家を探しに行くからね、謝らないといけないよ、順繰りに歩いて行くから、もう一度ね」と、母はその日のうちに、余ったのかもしれないのに、配り忘れた家を訪ねようと、道雄を諭した。

宵闇が迫る中、母は、販売店主に訳を話し、一部恵与してもらい、道雄に持たせた。

道雄は泣きべそをかいて、最初に配った家に向かって歩き始めた。

道雄の心は焦っていた。母は「ゆっくり思い出しなさい」と、道雄を宥めた。二人の影が次第に大きくなって、田舎と街の境目に来ると、何故か悲しい感情が迸った。

高級住宅地から閑雅な音楽の音が聞こえた。道雄は聞き覚えのある音に反応した。

白い壁に屋根が美しい、この辺りでは珍しい洋館風のモダンな玄関に鮮やかな芝植の庭が広がっている。鉄格子の塀に薔薇の蔦がいつぱい絡んでいた。

「母さん、多分ここだと思う」

と、道雄は空を見上げるように立派な屋敷を眺めた。

宏壮な建物の門柱の表札を母が確かめると、息が上がった。

そして、「よりによって」と嘆いた。

赤レンガの煙突があるこの家は、街のある議員さんの邸宅だった。

「どうして、ここだと分かるの？」

「いきなり、大きな犬が吠えていたし、びっくりしたあ、だから」

と、道雄は新聞を胸に引き寄せた。

母は恐る恐る曲がった人先指でチャイムを鳴らすと、期待を削いで、おかっぱ髪の小さな女の子が出てきた。

「遅くなつてすいません、これ新聞です」と道雄が言うと、

「お兄ちゃん、ありがとう」と無邪気な笑みが返ってきた。

母はホッとして頬は緩み、女の子にペコリと頭を下げた。

そして思わず道雄の両肩を引き寄せた。

二人は急ぎ、家路に着いた。

道雄は迷い込んだ杣道から明るい川岸に戻っていた。

新聞を川に捨てた日、正常な羅針盤に戻してくれたのは母の言葉だ。それはあの夜の時間にやって来て、その黒い懷に詰まった時間は、思いもよらない明日への期待が込められていた。

その日の宵闇、道雄は母の背中に光が見えた。

道雄の不達の家を探しだした母は、嘆くよりも歩を重ねよと命じた。まるで草の葉の芽はどこでも噴き出すように、諦めないで生きて欲しいと、命じる母の姿だったかもしれない。

道雄にまた春の日が来た。

無限に深い空から静かに聞こえる春の声に耳をすませると、兄の声がした。

「兄さん、墓参りに行こうよ」

「道雄、自転車は買ったのか？」

「まだだよ」

「道雄、大丈夫だ。今度こそ、自転車で家に帰るからな」

と兄は戯けて笑った。

（了）

小説部門

奨励賞

つきのはな

我如古莉子

一

忌屋、といふ場所がある。

月の障りが来た女を、穢れと呼んで閉じ込める空間。村の、うすぐらい一角。男がみな渋い顔を
して、近寄ろうともしない場所。

ここには女の女としての憂いと、血の臭いが重苦しく満ちていて、その沼からは抜け出せない。
ようやく息継ぎができるのは、七日経って綿に赤色が見えなくなつてから。そうなると、なんと
か沼から顔を出して息ができる。でもその下の体はいつだって赤い沼に浸っている。二十八日が
過ぐれば、また体も心も沈む。血の池地獄の繰り返し。

沼底に蠢くものは、不定形でどす黒い。そして、いくつもの触手を伸ばして、私達を逃がさない。

二

華子は、そんな場所で出会った女だった。

忌屋にいるときはいつも、隅の方で静かに座っていた。美しい女だった、と思う。

顔立ちが整っている、という意味ではない。痩せすぎているし、窪んだ瞳の下には、いつも深い隈が刻まれ生気がない。着物もあまり良いものでなく、小屋の隅でいつも寒そうに手を擦り合わせていた。

でもその幸の薄そうな雰囲気や儚げな容貌に引力を持ち、ひとを惹きつけるような、そんなところがあったのだ。とくにその瞳には、なんとも言いがたい静謐な艶があった。眉骨から目のところまでに段差のあるくつきりとした顔立ちが所以か、それともあの小屋の空気のためか、陽の下にあつてもなかなか光をとりこまず、黒々とした瞳だった。

——声をかけたのは、私が先だっただろうか。

華子とは、小屋の外で会ったことはなかった。村の女が集まって、立ち話なんかをする井戸にも現れなかった。話によると、村の端のほうに住んでいて、その近くの湧き水を使っているんだそう。

彼女と私は、いつも同じ日に小屋に入り、同じ日に小屋を出た。つまりは周期的なその障りの巡り方が、まったく同じだったのだ。体のなかで、おんなじときにおんなじことが起こっていた。それは彼女との一種の繋がりとさえいえるものだと、思っている。

三

「忌屋にいと、わけもなく悲しいわ」
冬の、ある月のこと。

床を這う冷たさが腹に響く季節。私達は小屋で火を焚き、身を寄せ合って過ごしていた。

障りの女とそうでない者は、同じ火を用いてはいけな——その火にあたった身や、煮炊きした食物が、穢れをもってしまうから。

火を分けるということは、生活を分けるということだ。だから私たちはこうして月に一度、小屋に来る。

目の前で煌々と燃える火は、指先の冷えをほどこしてくれる。冷たいものを食するのがつらいこの一週間を助けてくれる。

火は障りの私たちにも、等しく恩恵を与えていた。その恩恵のどこかに、穢れなるものは潜んだのだろうか。それが理解できないのは、ここに身を浸して生きる私たちだからかも知れない。

先のことを零した華子の輪郭は、炎の暖色とゆるやかに同化している。彼女の骨ばった頬を撫でる雫を、私は、いちばん近くで見えていた。

「障りが、くる少し前にも、そういう気持の日はあるけれど……肉体の不愉快があると、また違って、悲しい」

炎をうつした黒い瞳に、涙の膜が張る。その透明が、目のなかに光を取り入れて、落ちていく。光が、揺らぎ、溢れ、流れる。

腹が重たくて、股のところに不快感があつて、いつ着物を汚すかも分からなくて。不快そうな視線とともに小屋へ追いやられて。地を穢す身を横たえて、痛みに喘ぎ喘ぎ過ぐす、この七日間。鉄錆びた臭いが、女を、蝕む。

「……そうね。本当に、酷い気分」

強いて言うならば、地獄の共有者たる女だけがここに居ることが、互いの身に何が必要かを判りきつて預けることのできる安心が、忌屋の救いではあつた。

だから、今の私が彼女にしたいことも、きつと間違ひではない。

華子の、枝のようなゆびさきに触れる。びくりと、その肩が震えた。こちらを窺う黒に、私は微笑んでみせた。

「冬は、指先が冷えやすいでしょう」

その瞳に拒絶の色が滲んでいないことを確認して、私は華子の指を撫でた。軒先にできる氷柱を思い出す感触だ。かたくて、冷たくて、色がなくて。そして内にある寂しさを、喚起させる切実を秘めている。

じわりと体温が溶けあつて、ふたつのてのひらがひとつになるまで、私達はそうしていた。

四

「どうして、こんなに赤いのでしょうかね」

あるとき、廁に立って綿を取り換え、小屋にもどってきた華子がそう言った。

血液の、色。青い血をもつ生物もいると、聞いたことがある。海のそばに住む人が話し聞かせてくれたことだ。

月のものが、こんなに瞳に焼きつく色でなくてもいいのに、とは私も散々考えたものだ。

「見飽きるわよね。七日もあるのだから、色くらい日替わりしてくれたらいいのに。それなら少しは楽しくなると思わない？」

おどけてそんな風に投げると、華子は瞳をまるめた。

やるせなさや哀しさを、煮詰めて煮詰めて焦げついたような、真黒い瞳が、ほんの少し、和らぐ。私の視界、そのまんなかに彼女が据えられて、囚われたように瞬きもできぬその内に、華子の表情はまた変化してゆく。暗い雰囲気をつたえていた目元の隈は、涙袋に同化した。くちびるが、ゆるやかな弧をえがく。歯茎がちらりと見えた。白い頬に笑窪が浮かぶ。上品な笑い声が漏れる。……華子の笑顔は、初めて見た。

胸のまんなかのところに、甘やかな痛みが走る。彼女はわらうと、すこし幼げだった。

私にこどもがあつたら、こんな風なのだろうか——そう考えてしまうような、慈しみをはらんだ愛おしさだった。

五

月の障りは、身籠ると起こらないらしい。

自分が子どもを身籠ったことはないから知らないが、お医者様が言っていた。そういえば、小屋で見なくなった女はみな、数ヶ月後には子を抱いていた。

女と男、それぞれの種があつて初めて生まれる、子というもの。その成り損ないが、障りの正体らしい。月のものを月水と呼び、生まれる前に死んだ子を水子と呼ぶのも、きつと、そういうことだ。

つまり綿に染み出すこれは、命だ。無様に流れ出る赤は、黒は、私の子だ。私の、産むはずだった、この腕に抱くはずだった子だ。

だから伴う痛みも狂気もすべて、罰なのだろう。

わが子を死の穢れに落としたり、女の身への。

六

とすれば、この女は罪を共有している——華子の白い首筋が動くのを見ながら、そんなことを考えた。簡単に折れてしまいそうな細い喉が、今にも消えてなくなりそうに掠れた声が、祈りを紡ぐ。

小屋で床に入る前、華子は血盆経を唱えることを欠かさなかった。

私も初潮が来たときには、母にそれを習った——女は産まれつき罪業を抱えていて、死んだら血の池地獄に落ちるのだから、欠かさずこれを唱えなさい、敬虔でありなさい、と、そんなふうに。しかし時代も進み、いまやそれを信じるものも減っている。

私と華子はいたい、小屋にふたりきりだったが、他に女がいたときも、経を唱える者なんていなかった。私もそうだ。そんなものはばかばかしいとすら思う。しかし華子は、そうではなかった。その身に罪を認め、一切を顧みずただ救済を待つて、信心深く欲深く、手を伸ばす。そのときだけは、彼女に平静の陰気さを感じ取れなかった。かたく閉じられた瞳を縁取る、その睫毛を見つめていると、私まで地獄から引き上げてもらえるような気すらした。

穢れの最中にありながら、彼女はたしかに、美しかった。

七

女は災厄で、女は毒だ。

経血で地を、水を、陽の光を汚す。植物を枯らす。食物を腐らせる。

なんてばかばかしい言説、と、障りでないときは思うのだけど、障りの足音を感じる頃になるともう、そんな浅ましい言葉すら、がんが脳と精神に響いて、私たちを苛む。どうして私が、なぜ私を、そんな風に神や世界に向いていたはずの怒りは、いつの間にか自分に向いて、女の心を狂わせる。もしかしたら、これは本当に悪魔か何かかもしれない。

泣いて喚き散らす女など、いくらでも居た。取り憑かれたように柱に頭をぶつけ続けて、そのまま死んでしまった女も居た。ここは地獄。生涯身を浸す沼。月に七日、私たちの受ける罰。女は厄。悪魔。毒。

そんなことが、赤と暮らすうちに、私たちの中に刷り込まれていく。常識として、溶け込んでいく。

八

はじめてあの赤を目にした日のことを、私は鮮明に覚えている。

お気に入りだった寝着が穢れに満ちて、はだにふれる布は重くて。あの朝の不快感といったらなかった。

なにか起こったのかわからず私は、隣で眠っていた父をゆさぶり起こした。目を覚ました父は驚いたように瞳を丸め、それから眉を顰めた。彼は母を呼ぶとすぐにその場から離れた。母も父のように驚いた表情をして、それから言葉を選びながら、私に話をしてくれた。

月の巡りとともに、女性のからだに訪れるもの。正しい対応と処置。お馬と呼ばれる帯の使い方。このとき初めて、母が月に一度、家を離れてしまうことの理由を知った。

説明の最後に彼女は、私のときよりずっと早かったから驚いてしまったと、父もきつと同じだからあなたのことを嫌いになったわけではないのよと、そんなふうにつけ加えた。

そうして母は、私に忌屋の場所を伝えた。いっしょには行けないのぐめんねと、そのようなことを言っていたような気がする。いま思えば、私の穢れに触れてしまえば彼女は炊事洗濯もままならなくなるのだから仕様がなない。けれど私は寂しかった。

なにかが、これまでと決定的に異なってしまったのだと、そしてもう以前に戻ることは叶わないのだと、そのことだけがわかって、頭の中から父の視線は離れなくて。心細いの、母のぬくも

りを手にすることはできなくて。そうして、今ここにある仄かな痛み——はじめの頃はいまよりずっと、楽なものだったけれど——と赤と、穢れと、これまでは知らなくてもよかったお馬や、忌屋での生活が、この先ずっと私の生活に絡みつくのだということが、とても信じられなかった。それでも行かなくてはならなかったから、胸騒ぎから目を逸らして、私は家を後にした。

家の扉を閉めるそのとき、父の姿が見えた。家の中、扉から離れたところに立って、彼は私が出ていくのを見つめていた。扉の音に重なるようにして、父がひとこと、呟いた。

「お前ももう、女か」

あの日の父の表情だけは、もやがかかったように思い出せない。

九

私が旦那と契りを交わして、もう五年になる。頬に朱をまじえ互いを求めた、情熱的な夜伽はもう無くて、それはただ、彼が私に種を注ぐだけの時間だった。

汗ばんだ肌が、あつい。不快なべたつきが、体を這う。

ただ義務的に夜をこなす旦那の、その顔を見上げる時間は、衣の擦れる音は、こんなにも空虚であつたろうか。いつからか私は、ただもう赤色を見ることがありませんようにと、今月こそはきつとと、祈り祈りにそれを受け容れた。伽の時間はあまりに退屈で、ふつと華子のことを考えたりした。

——華子もこんなふうに、男に抱かれることがあるのだろうか。そもそも華子に、旦那はいるのだろうか。彼女は私より、若いはずなのだけれど。

絶望の共有者たる華子のことだけを考えてまぶたを下ろすと、その暗がりにはあの瞳に似ていた。はだにふれる熱や、刺激が、この日は少し心地よかった。

十

毎月まっとうに抱かれている。行為にさしたる問題はないはずだ。

でも、私が子を授かることは無かった。障りは毎月、腹立たしいほど周期の通りに訪れた。

小屋に行くときに訪れるたび、旦那と、それからお義母さまの落胆の視線に晒されることが恐ろしかった。障りそのものも大変に煩わしいけれど、あの溜息ほど精神を蝕みはしなかった。綿の赤色を見ると、毎月毎月律儀に、私のからだは強張った。

——どうして、いつの間に私は、こんなに罪深き女というものに、成ってしまったのだろう。いつから女は女なのだろう。

旦那を迎え入れるときだろうか。初潮がはじまったときだろうか。それとも生まれたときか？母の胎のなかに居るときにはすでに、女か？

沢山の視線が、言葉が、そうあるべきだと与えられた役割が、意志とは無関係に変化してゆくからだが——私に、その形を知らせた。

強い光を浴びれば、足元に濃い影が落ちる。獣の死骸には、小さな虫があつまって食む。腐った

果物が、その汁で籠を染める。そんなふうに私は、女の輪郭を見る。白いはだに紅のくちびるを、内側には従順で可憐な精神を。

華奢な体軀を、守られるべき弱い筋肉を。

柔らかな胸部を、子を育むための機能を。

締まったくびれを、命を守りゆく器官を。

腰のえがく曲線を、男を受け容れる穴を。

情欲を煽る肉体を。種を繋ぐための生を。

私は女として生まれ、女としてその罪を背負っている。

そのはずなのに女の務めも果たせず、罪の部分、だけでそのまま、息をしている。

十一

「綿は足りそう？」

忌屋の裏手。溜めた雨水に綿をさらしていると、同じくそれを洗いにきたらしい華子に声をかけられた。いつもなら、赤黒く染まった水を誰かに見せるのは後ろめたい——たとえ相手が、同じ穢れをもつ女だったとしても——ように思われるが、彼女に対してはどうしてか、平気だった。

「……今日洗うぶんが、乾けば、かしら」

男や障りでない女は近づかない場所だといっても、小屋の外であまり大っぴらにするのは下品

だから、ふたりとも、囁きあうように話した。水音に溶けてしまいそうな華子の声が、こう呟いた。
「お洗濯物なら、今日の陽射しで、乾くのにな」

華子は私の隣に桶を置いて、それからは無言でただ綿を洗った。私も自身の罪の証が、流れ出ていくような気がして、水に濁りがなくなるまで、必死に、洗った。

――障りに触れた綿を、お天道様に晒してはいけない。

はじめて忌屋に入った日、私に案内をしてくれた女性から、かたく言いつけられたこと。そして今は私が、教えていること。

私たちのからだが生む赤は、神聖な陽の光に、見せてはいけないものなのだ、と。

十二

こえがきこえる。

うまれたかった、って、舌足らずな声が。
どうして産めないの、って、甲高い声が。

あかいろがみえる。

私が産めなかった命が流れ出していく。

ああ、また、来た。私が、私が殺した。

声はだんだん、口汚いものにことばを変えながら、響いていく。部屋全体が震えるほどに、たくさん、たくさん、きこえる。赤色は視界のあらゆるものとまざって、融解して、やがて滲んで

いく。目を閉じても、きえない。

絹を裂くような奇声が、一等大きく鳴いた。喉がひりついた。咳が出た。ああ、私の声だったのか。

十三

どこまでが、夢だったのだろう。

床から身を起こすと、寝汗が全身にまとわりついて、風が厭に寒かった。それと同時に、股のところから、どろりという、あの、生温いものが溢れる感触がした。腹が重たい。腰に響く痛みがある。

恐る恐る寢着を捲るとやはり、それは予定日びつたりで訪れた障りだった。予想ができたから寝具に染み出すことを防げたのは、せてものの、本当にせてものの幸運だった。

予想は適うくせに、祈りは叶えないこの身が。

どこまでも悔しくて、惨めだ。

旦那に、障りですから小屋へゆきますと伝えたと、諦めたような視線と溜息だけを寄越す。この、いたたまれない感覚と、虚ろな絶望は、何度繰り返しても慣れることができない。

瞳に水の膜が張ったのをせて悟られぬように、旦那に頭を下げる。きつと彼はそれすら、もう見ていない。

床を見つめたまま、廊下を辿り、家を出る。せめてあの女に——お義母さまに見つからなければ、平気。平気。まだ、耐えられる。

時期の予測ができていたぶん、準備だつてすぐに終わつた。

市場へ行つたお義母さまは、まだ帰らないはずだ。

はやく、ここを出、

「どこへ行くんだ」

十四

戸に手をかけようと、したその瞬間に、向こう側から開いた。

建て付けの悪いこの戸は、開くたびにぎいitto、不快な音を立てる。でもそれよりもずっと、鼓動のほうが、響いた。

「——お義母さま」

からだだが、硬い。唇は水分を失っていた。私は石だつた。

先の問いに私が答えるより先に、お義母さまが口を開いた。そして二十八日ぶりの、私を責め立てる言葉を吐く。そのために舌があるように迷いなく。醜く黄ばんだ歯を露わにして。

「障りがきたんだろう。こう毎月、あんな陰気な場所で過ごして、嫌にならんもんかね」

抱えていた荷物に、お義母さまの唾が飛ぶ。

それが合図のように、彼女は語調を強めていく。

「あたしは七人産んだよ。そのうち五人が男さ。忌屋になんか行く暇なかった。これが女の務めだろう」

「家を継ぐ子を産めないなんて、女失格さ」

「なんだ、その生意気な目は。子を慈しむ女の心があんたにないから、授けられないんだ」

「あんたなんか、嫁にするんじゃないよ。息子がかわいそうだ」

あんたなんか——そこでお義母さまはまた、くちびるを歪める。下品に歪んだ三日月が、私を苛む月が、そこに在った。

「子を孕めないなら、娼婦にでもなった方がいいんじゃないのかい」

十五

私がお義母さまになんと言ったのか、どんな表情で彼女にことばを返したのか、もう覚えていない。

気づけば忌屋の前にいた。息が切れていて、腹がいつもより酷く痛むから、ここまで走ってきたのだろう。股当ての綿がずれてしまったのか、腿に濡れた感触があった。

とにかく華子に会いたかった。

華子の昏い瞳を、この精神の慰めにしたかった。

苦いものを共有して、おなじ業を背負っていたかった。

彼女に会うことだけが、ここへ身を浸す中で、唯一の救いだつたのだ——私は、華子と一緒になら、今日ここで、死ぬことだつて怖くない。

しかし小屋の扉を開けると、そこに華子は居なかった。

障りの日は、みんなびったり決まっている、というわけではない。先月は居た女が今月の同じ日にはいない、なんてことは多い。どころか毎月、びったり二十八日で巡っていた私や華子のほうが、特異ではないだろうか。

次の日も、また次の日も華子は来なかった。華子がいらない小屋で、私は七日間を終えた。

ひとりで寝、起き、綿を替えて、洗って、日陰で干して、掃除をする。せつかく焚いた火が、冷たかった。

ここに今、たったひとりで、罪を背負つて生きている。それがとても、惨め、だつた。

華子との繋がりが途絶えてしまったように感じて、ほんの少し、胸騒ぎがした。

十六

その次の障りの日も、華子是小屋に来なかった。

やはり、周期がずれてしまったのだ。

このまま同じように障りが巡り続けたら、もう、華子に会えないのだろうか。

十七

もう三度目の、華子のいない忌屋。

このふた月の間私は、旦那に抱かれる夜の天井に、お義母さまの汚れた爪に、綿に混じる黒い塊に、何度も華子の瞳を見た。

ひとりで忌屋にいる間はずっと、華子と共に逃亡することを考えていた。あるいは共に死ぬる日を夢想した。

この忌屋の鬱気には、自裁なんて珍しいものじゃない。女は、どうせ地獄に堕ちるのだから、私はいつその瞳に心中がしたい。救済を待つ華子に、それでも一緒に堕ちてほしい。ここで不幸を共有した私を、終の相手に選んでほしい。

こんなことを考えるのは、きつと今が障りだからだ。毎日毎日赤を見て、鉄の臭いや鈍い痛みと、同居しなくてはならないからだ。そんなことはわかつているけれど、でも、どうせ二十八日後には、またここに来るのだ。

何度も何度も伽を済ませて、障りと過ごして、もうきつと私に、子を抱く日などないのだと知った。私のなかの希望の篝火は、もう、ひかりも熱も、持つてはいなかった。でもずっと、焦げついて、痛いのだからどうしようもない。

二度とここへ来ない身分が欲しかった。子が授けられないのならもう方法は、ひとつだけしか思いつかなかった。そして我儘にも、そんな最期に華子が居てほしいと思った。

次に華子と会うとき、私はきつとあの薄い衣の袖を引いて、愚かな願いを零すだろう。神には祈らなかつたこの舌で。

どうか、この七日間の、一時の希死念慮に領いてほしい。そうして最期に笑つてほしい。私はあの笑窪に、吸い込まれるように死にたい。

十八

今月も、華子は来なかつた。

十九

今月も、私はひとりだつた。

二十

ここにはだれもない。

一人で背負うには、罪も穢れも、痛みも寒さも、重すぎる。

二十一

重い。

腹も腰も、罪も、なにもかも。

心臓がずっと、暗いものに掴まれて、爪を立てられ続けている。

——もう限界だ、と思った。

二十二

いつもより嚴重に綿を巻いて、股に詰め物をする。赤がこぼれてしまわないように。障り中の女であるとは、決してばれないように。

あふれそうなほどの穢れをやどしたこの身で、それでも華子に会いたかった。

小屋から一步を、踏みだす。それを咎めるように、中からどろりと溢れる、あの感触がした。鼓動が胸を打ち鳴らす。障りの最中に、ここを出るのは、初めてだ。

その一步は、七日間を無事に終えて出ていく一步と変わらないはずだが、とてもそうは思えないほど、息が詰まった。ゆびさが震えた。空気の重みが、私の周辺だけに強くなるしかかっていた。

村のはずれで、湧き水のある方は、たしか北の一角だけだ。

そこへ向かったとて、華子に会えるかなんてわからない。

私が小屋にいないことが、ばれてしまったらどうしよう。

そんな不安の曇りよりも、女の罪業に満ちたあの場所で、華子のいない忌屋で、息をすることの方が恐ろしかった。

垂らした髪で顔を隠しながら、北へ、北へ。とにかく村の端のほうへ。歩みを進めるたび痛む腹が、私を責め立てていた。

だいぶん歩いた頃。とりあえず湧き水の方までは歩こうと、諦めがつくまでは行ってみようと足を動かしながら、前を歩いてくる男女に、何とはなしに目を遣った——ときだった。

笑窪だ。

談笑する夫婦らしき男女、その女のほうに、私が心中を願ったあの笑窪がついていた。

でもそれが華子だと、私は咄嗟に認識することができなかった。私の脳が、心が、それをはつきりと拒んだ。

よく見るとたしかに、その顔立ちは華子だった。すこし窪んだ目もと、細い鼻筋、薄い唇。しかしその頬の笑窪は、私が、私でもたった一度しか、見たことがなくて、だって華子はあんなふうに、ひとと笑いあうような性格では、ない、はずで。あんな顔をして笑うのが、華子な筈がなくて。

では今見ている女は誰だ。黒目がちな瞳が暗い印象を与えず、むしろ愛らしいようなあの女は。男の隣を歩いて、楽しそうに笑い声を上げている女は誰だ。

あの、細い腕で、腹をさすって——腹を？
障りでも、ないのに？

二十三

あ。

ああ。

そうか。

周期がずれたのではなくて。

華子は、小屋へ来る必要がなくなったのだ。

女の腹は、膨らんでいた。

どうして、気付けなかったのか。

華子にも人並みの生活があり、人並みのしあわせがあったことに。

私が見た華子は、女の精神を狂わせ墮とす、あの小屋の中のものであったことに。それを、華子の全てだと思い込んで、私は、ずっと——ずっと。ずっと。

黒い瞳に、惹かれて、共鳴できた気になって、——。

私の心臓はもう、徹底的に握り潰されて、しまった。

華子は真っ当にしあわせだった。

胎には子がいて、隣には男があった。それが本当の彼女だった。

小屋の外の彼女は幸福で。

私とは、違うんだった。

二十四

月に七日、年に八十四日。私の見た華子など、それだけだった。

月に二十三日、年に二百八十一日。何倍の日数、何倍の笑顔を、あの男は。私と居た地獄の底と、幸福な家庭とを、比べるべくもない——けれど。

それでも私は、あの華子に会いたい。

胡乱な瞳に会いたい。貧相な牀に会いたい。悲慘な心の、貪婪な精神の華子に会いたい。月には七日、年に八十四日。

あの華子は、美しいのだ。

二十五

男女と、すれ違うほど接近してしまう前に、私は踵を返して、小屋のある方角へ向かう。

冷水を浴びせられた気分だった。もうどうしたって、私の火は灯らない。底冷えのする寒さと、昏迷に満ちた鼓動が、胸のなかを吹き荒らしていた。

私の知っている華子は、小屋の外にはいなかった。

そしてあの華子が私の世界と交わることは、きつともう二度と、ないのだ。

——では私は、どう生きればいい？

小屋に戻れば一人だ。七日間が終わつて小屋から出れば、あの冷たい視線が待っている。

——ならば夢想していたように、死ぬのがいいか？

でも一緒に死ぬる相手も、いない。共にすべてを捨てるには、華子はきっと幸福過ぎる。

……ああ、でも、もしも私が、無理にでもあの、細い首筋に力をこめれば。

恐怖で彼女の表情は、歪むのかもしれない。一切の光を通さない、黒々した瞳がまた、見られるのかもしれない。

私と共に地獄で過ごした七日間が、最期として、彼女のすべてになるのなら。

それは私に残された、唯一の。

爪先が、今きた道を戻ろうと、つまり華子のいた北の方角に行こうと、向きを変えた。草履が砂利を踏んだ。一步を、踏み出した。もっと大きな罪の前には、もはや忌屋を出ることなど怖くもなかった。どうせ私は地獄に堕ちる。はじめからそうだ。女は地獄に堕ちるのだ。だから彼女と一緒に、行くのだ。

二十六
瞬きを、した。

なんの気なしに、ただ生物としておこなっただけのその動きに、私の歩みは止まった。臉の裏の闇は、華子の瞳に似ていた。小屋の中だけの、月に七日間だけのあの、瞳だ。次の瞬きと同時に、瞳の奥がつんと鳴いた。唇を噛んだ。ただ華子の黒色とそこから滲んだ透明と、祈りをつむぐ口許と、てのひらの温度と、それから笑窪を、思い出していた。私は泣いた。

二十七

華子がここで死ぬべきではないと、痛烈にそう思った。彼女は罪から、放たれたのだ。

それがどれだけ苦しいか、私には知れないけれど、綿を当てていたところから、成り損ないではない本物の、命を産むだろう。

綿を洗っていたあの腕にこれから、子を抱くだろう。私のふれたてのひらは、子どもを撫でるものになる。あのかわいい笑窪を、毎日浮かべられるような生活がある。救いを待つ健気な彼女は、大いなる慈しみをもってその子を育てるのだろう——すべてはそのため、あの小屋の苦しみが在ったのだから。

どこまでも清らかだった黒色はきつと、光をやどしても尚、美しい。私が目にすることは叶わなくとも、その未来がいいと思った。

二十八

××××年×月××日。

忌屋にて、女性が縊死。

発見者は、××日に障りが始まった村の少女。

遺体が発見されたときには、すでに腐臭を放っていた。

また、宙に浮いたその素足の下には、垂れ流したあれそれに混じり、ソノ血も存在したという。

以上のことから、障りの女性が特有のヒステリイを発症し、自裁に至ったものと思われる。

×××所×××

詩部門

奨励賞

アルル

芭蕉布のうた

うめる

雨、上がる

二藤 瑠花／55

室園 美音／57

外田 さし／61

南野 すみれ／65



*

*

詩部門

奨励賞

アルル

二藤 瑠花

運転中に立ち上がると非常に危険です
安全に停止するまで少々お待ちください

「どこから来たんですか」

「ずっと南の方です」

「暖かいところですか」

「そうですね。ここよりは幾分か。暖かくて、日が暮れる時間が遅くて、若い母親に連れられた小さい子は、夜遅くまで外を出歩いているんです。はは。そもそも、その若い母親も若くで産んだ親の元で育っていますから、繰り返されているだけなんですけどね。大抵は、シングルマザーになって、母親も子供も疲弊しきってしまいますね。／ゲームセンターのコイ

ンゲームに、死んだ魚の目でメダルを垂れ流す母の姿／ガラバゴス化した島の、閉塞的な暮らしか見ていないから、若くで子供を産んで育てることが真つ当な生き方、親孝行だと思つてしまう。でも、実際は中卒で働いて、子を養える生活費すら儘ならないのに、貧困を正當化して子供にまともな教育を受けさせることができず堂々巡り。そんなの馬鹿らしくて見られませんか。あ、ほかに良いところを話せつて？ そうだな、年中暖かいから外で寝ても死なないところとかですか？／帰つてこない母を探して、居酒屋街で男と腕を組み酔っ払っている姿を見た小学三年生の冬／そんな生き方を普通だと言い張つて、押し付けてくる大人たちが気持ち悪くて何のつて。高校の頃の友達は、父親がギャンブル好きで、母親がホテル清掃をして、友達は毎朝スーパで売られている百円より安いおにぎり1つ持つてきて食べていました。高校を卒業して、父親が病死して、彼女は、母親とリゾートホテルの清掃をしています。一泊二十万円の金持ちの娯楽を、これから長い人生のある若者が朝から晩まで掃除して回っているなんて、知る由もなく、綺麗な海、豊かな自然、美味しい食べ物、混ぜ合わせて人々は酔いつぶれて、それを良しとする。／ダイビング中に溺れて浮かび上がった死体が海面で揺れている／

「なんだか、異国みたいですね」

車内では、携帯電話での通話はお控え下さいますようお願いします

詩部門

奨励賞

芭蕉布のうた

室園 美音

芭蕉の布は 風を軽やかに通す

涼しげに透きとおる心

野の色にそまつた布

風景の一つになつて 佇む夕暮れ

芭蕉は 風に揺れながら

葉擦れの音をひびかせる

布の音に聞きほれて

色と模様の織りなす世界に引き込まれ

布の折り目に眼を凝らす

苧（う）績（う）みをたどる

籠に入った續まれた苧

ゆんたくの声が 語っていた

イトバシヨウのはじめから

迎えられた畑はふくよかな土

それから それから

やわらかな繊維をとるために

葉打ちや芯止めを繰り返す

雨の音も雷も

注ぐ太陽の強烈な光の中で

人々に見守られ

ともにあり 風にゆれる

イトバシヨウの収穫は 秋から冬

良く育ち柔らかい繊維をもった

イトバシヨウの株を倒す 苧倒し

まあだ まだ

骨の折れる作業がつづく

皮が 巻き重なってきたところを

外の方から剥いでゆく 芋剥ぎ

中に行くほど白く柔らかい繊維になる

木灰を入れて 芋炊き

蓋をされた鍋の中

束ねられた皮は 柔らかくなつてゆく

とがった硬さのある角が

竹ばさみで芋引きされて落とされる

背筋をのばされ儀式のようにかしこまる

そうして初めて

はた結びの芋績みをむかえる

ゆんたくの声は 休むことはない

時間のかかる芋績みに 爪と指は働きづめ

「いっぱい績んで布にしたい」と

身体の痛みがある日も

見えない内の痛みがある日にも

なぐさめと喜びをもたらしたのだと

作り続け 守り続け 残されたもの

受け継ぐ人たち たしかな小さき歩み

籠に入った 續まれたありのままの草は
風をうけたときの喜びのように

あくまでも軽く どこまでも重厚に

きらきらと微かな光を放っている

イトバシヨウの緑や風の音

空や海の輝きが波のように打ち寄せてくる

詩部門

奨励賞

うめる

外田 さし

あの人はいなくなつた
だから

この子もいなくなつてしまつたのか

せつかくのネイルが剥げるのも厭わない
もつと深く もつと遠く

この子と二度と会わないように 掘る

客が取れなくなつてどうすんのよ
ママは呆れた

動けるうちは働きますって

あの人がきつと迎えに来てくれますって
ばかだな

あの人には家族があるのに

こんなに小さな爪のついた指先

誰の手も握ることなく

この子はいなくなってしまうた

涙も鼻水も拭わなくても構わない

もつと深く もつと強く

この子が二度と会えないように 掘る

産んじゃいけない立場で

産んでほしいと言う人もいなくて

だから

この子はいなくなってしまったのかなあ

抱きしめた赤ちゃんの

硬さ

本当のお母さんになれなくて

ちゃんとうめなくてごめんなさい

確かに愛されていた土の下のわが子も
その墓前に崩れる子どもの母の背中も
父親たちは誰も知らない

早産した子を捨てた娼妓

本月二日、那覇区字西三八四番地、
照屋仁王宅前の墓地に捨子があつた
が、あとで、その捨子は渡地遊郭二
三三番地の娼妓××××（二十三）
の子で、七ヵ月目に分娩して死亡し
たもので、去る旧五月二十二日夜、

洲宗の崎に埋葬したが、かぶせた土が浅かったので、犬が掘り出して、ところどころ嚙みさかれていた。

(明治三十二年 七月 十五日)

(了)

注1) 引用は『沖縄の遊郭―新聞資料集成―辻・仲島・渡地各地の料理屋事情』(太田良博・

佐久田繁編著・月刊沖縄社・昭和59)による。

注2) 記事内の娼妓氏名の伏字は引用者による。

詩部門

奨励賞

雨、上がる

南野すみれ

天井に原木の梁

カフェのなかのおんなたちは
秘密の話に余念がない
声が漂い渦巻いている

向かいに座るあなたの言葉が
渦の中から矢のように飛んできた
きりつと突く
刺さった場所で言葉が崩壊する

砕けた言葉を組みなおすそのときに

もう無理だと足元から上がってくるものがあつた

あなたがのぞむ返事を作れない

組みなおした言葉がまた崩れていく

頭の中では言葉がてんでに動きまわる

真正面のあなたの目から 左へ

顔を移した

外は雨が止んで

硝子の向こう、葉々に陽があたっている

唇は鍵をかけたように動かないのに

日陰の葉からは滴が流れて

落ちた

隣の女性が席を立つ

あつ

飛び散るアールグレイ

短歌部門

最優秀賞

くすむ青

富井 嫉妬／67

奨励賞

並行世界
勇み立つ子ら
生きる。

花木 詩香／68
銘苅 愛子／69
タークネスちくわぶ／70

*

*



短歌部門

最優秀賞

くすむ青

富井
嫉妬

人質のつもりで借りている本の手触りがよすぎて頼りない

泣き方を忘れてられるからできるだけドライブは遠くを目指す

頼んでもないのに2年前からの笑顔がスライドショーで流れる

音として聞いてた歌が声として届いてすべて僕宛てだった

描きかけの空を甦らせたくて塗れば塗り足すほどくすむ青

短歌部門

奨励賞

並行世界

花木
詩香

億年の地球歴史の証なり巖を守る三葉虫は

黄昏どき貝拾う港川人ふり返るとウーバーイーツ

海底に白化珊瑚の墓ありけりジュゴンの棲める海や何処へ

大度浜船の漂着霧越しに万次郎の姿見え隠れす

海神(わたつみ)や時の操り能ふならニライカナイの世で留めたし

短歌部門

奨励賞

勇み立つ子ら

銘苧 愛子

ジャケットにリメイクしたる芭蕉バサージン着物母の温もり感じていたり

おくるみに包みたる如ぬくぬくと育む菩提樹戦死者弔う

離り住む米と本土の子どもらと共に眺むる後の月美し

天高く子らの掲げる旗頭那覇おおつな大綱挽きへ大人寄り添い

出陣の如く太鼓を打ち鳴らし旗頭行列勇み立つ子ら

短歌部門

奨励賞

生きる。

ダークネスちくわぶ

授業中せまるねむけにあらがえず

昨日は早く寝たはずなのに

犬のえさ食べて美味いと従兄弟たち

まともなのはっ!! 僕、だけなのか!?

浮かぶ月見上げてひとつ思う事

最近ずっと満月な気が

うざ絡み課題に集中したいけど

いないと少し寂しくなるよ

曾祖母も創った曲も没になる

うまくはいかず訃報に暮れる

エッセイ部門

最優秀賞

言葉の前にあるもの

外田 さし／73

奨励賞

胡桃もちが教えてくれたこと

中里ちあき／79



*

*

エッセイ部門

最優秀賞

言葉の前にあるもの

外田 さし

はじめに言葉ありき。言葉は神と共にあり、言葉は神であつた。言葉は神と共にあつた。万物は言葉によつて成り、言葉によらず成つたものはひとつもなかった。

新約聖書の有名なフレーズだ。世界は神の言葉から始まり、すなわち言葉は神、世界の根源に神が存在する。本来の解釈とは異なるが、クリスチャンではない私はこの名句を「人は言葉の獲得によつて自分の生きる世界を認識している」と捉えている。

自分が何者でどんな状態にあるかを把握するためには、「私」「は」「お腹」「が」「空いた」など言語化する必要がある。それがなければ、他者とのコミュニケーションはおろか、自分が何者かも分からずただぼんやりと生存しているだけの人になってしまうだろう。

だから言葉は大切だ、自分を知り他者や世界をより深く知るためにも言葉の数を増やそう。――

そんなことを中学生に話しては生計を立てている私の前に、言葉によるコミュニケーションが一筋縄ではいかない相手が現れた。

昨年、私の腹からホギヤーと世に出てきたすん氏である。

普段は仕事で関わる子ども達に語彙を増やせと言っている私は、語彙も何もホギヤーしか言えない人と暮らすのは初めであった。新生児室で天井を見つめるすん氏と対面するたび、「いかにしてこの小さな人と思疎通すればよいのだろう」と呆然とした。退院して家で二人きりで過ごし始めてからもその困惑は長らく続いた。

泣くのは空腹や眠気に襲われた時に限る子だったので、要求を察知することはできた。育てやすい方だったと思う。しかし、この人が何を考えているのか全く分からない。

赤ちゃんの思考が読めないのは当然と言えばそれまでだが、静かに虚空を見つめているほわほわとした生物と、人間らしいふれあいをするのは不可能に思っていた。

そもそも発語以前に、生後長らくすん氏は笑わなかった。新生児微笑も社会的微笑もなく、ずっとボーカーフェイスだった。

赤ちゃんとは、こんなにも表情が変わらないものなのか。「私の声掛けが足りない？ もしや障害がある？ 諸々の検査に問題はなかったけど…」と悶々と過ごした。もはや私と一体化していたというのが怪しくなってくる。ほんとに私が産んだのだろうか。

会話が成立しない相手と過ごすというのは、こんなにも大変なのか。とにかくすん氏を抱っこしては童謡を歌うか、「風でカーテンが揺れているね」「ニャンニャ、猫が歩いているね」と実況

し続けては夫が帰宅するまでの一日を耐えた。

異星から来た生物と異文化交流する気持ちですん氏と過ごしていたが、この小さな宇宙人は徐々に独自の感情表現をし始めてきた。

私がすん氏の顔を覗き込んだ時、両手足をずんずん動かして踊っているような動きをする。偶然かと思っていたが、このずんずんは、ミルクの入った哺乳瓶を見た時や散歩中に木漏れ日の下を通る時、遂に「抱っこ」と発した時に行われると気づいた。

無表情ではあるものの元氣よくジタバタするすん氏に、喜びという感情があり、それを表すことができると知った感動たるや。この子はたしかに、私と同じ地球人だったのだ。

考えてみると、何もせずとも満たされていたお腹の中から出て、逐一自分の要望を周囲にアピールしなければならぬのだから、すん氏にとつては相当な労力だろう。そしてさらにこれから多くの感情を獲得して、表明する訓練を積み重ねなければならないというのだから……赤ちゃんって大変だなあ、と尊敬の念を抱かずにはいられなかった。

すん氏は引き続き無表情ではあったが、自力で動ける範囲が広がると自分のやりたいように積極的に行動するようになった。目線を向けたり、手を伸ばしたりして要望を伝えてくる。とにかく体を動かして意思表示をするタイプと見たが、やはりすん氏は、うれしい時には手先を動かせるようになるのと両手をひらひらとカチャーシーを踊るように掲げるようになった。

気が付くと周囲の人間にニコニコと微笑むようになっていた。それでもすん氏は両手ひらひらとセツトで「楽しい・うれしい」を表明し、一歳を過ぎて喃語が増えた現在でもそれは続いている。

将来はダンスなんか習わせると伸びるのではないか、と気が早いのは承知でアクターズスクールの情報を漁ったりしている。

それにしても、恐るべし、ノンバーバルコミュニケーション。

言語を介さずとも意思疎通ができるわが子のコミュニケーション能力（ほとんどの赤ちゃんができるだろうに。親バカだな）に感動していたが、ある本を読んで私はさらに衝撃を受けた。実は、私もすん氏に対して「言葉」を話していなかったらしい。

親が赤ん坊に話しかけるときの「インファント・ダイレクテッド・スピーチ」です。あれは音声言語のルーツの一つじゃないかと思っています。（山極寿一・他『動物たちは何を話しているのか？』）

京大前総長でゴリラ学の権威である山極寿一氏が言及していた乳児に話しかける際の言葉（インファント・ダイレクテッド・スピーチ）というものは、意味より声の音程やトーンが重要とされる「音楽的な言葉」らしい。私は自分がヒトの言語を以てしてすん氏に話しかけていたつもりが、どうやらそれは「音声言語のルーツ」だったようだ。私は童謡を歌うことと身の回りを実況することと、すん氏に与える言葉を使い分けていたつもりが、すん氏にはすべて音楽に聞こえていたのか。

となると、すん氏は子宮の外の世界を「私の音声による音楽」で認識し、私はすん氏のことを

泣き声と身体の動きで読み取っていたことになる。

なんと奇妙なコミュニケーションだろう。

おなじみの「はじめに言葉ありき。」はどこへやら、我々母子の間に創られた小さな世界は「言葉によらず成ったもの」だったのだ。

母性神話が世に浸透して久しい。初めから母性が備わっていて当たり前だとは全く思わないし、実際私も初対面から一年以上経った現在もわが子との接し方の正解を探している。

しかし、生まれたばかりの子どもとの、言葉の前にある原始の対話を生み出しているのは、愛情に他ならないだろう。

相手のことを知りたい、自分のことを知ってほしい、言葉を正確に伝えたり受け止めたりするための模索は、大人になってからも大切なコミュニケーションの基盤であり、それを好意や関心、広く愛情と呼ぶこともあるだろう。

ただ、やはり学歴も肩書きも言葉さえも意味を無くす、乳児期だけのコミュニケーションは特別だ。私の感情なんか置き去りで構わない。あなたから発せられるメッセージを、何ひとつ残すことなく受け止めたい。

一生の中でほんのひとときにしか生まれない対話のまぶしさを、一生覚えていたい。この初めての対話を経験させてくれただけでも、私はすん氏に永遠にありがとうを伝えなければならない。そして、すん氏が私の手を離れ自分の世界を歩んでいけるよう、たくさんの言葉を授けていきたい。

そう思いながらも、すん氏、まずは空腹でも眠くもなく、排泄も終えた快適な状態で母の腕の
(了)

引用文献 『動物たちは何をしゃべっているのか?』

山極寿一・鈴木俊貴 集英社 二〇二三年八月

エッセイ部門

奨励賞

胡桃もちが教えてくれたこと

中里ちあき

五十を過ぎた頃から今後食べる事はできないであろう子供時代に食べた懐かしい味が恋しくなる時がある。

私は沖縄好きが高じて、当時つき合っていた同じく沖縄好きの夫と結婚を機に埼玉から沖縄に移住し、かれこれ三十年が経った。

沖縄では本土に見られるもち米について作ったもちを食べる習慣がなく、その機会もないに等しいので、余計につきたてのもちに関する思いが募るのだ。

その中でも、母方の祖母が作ってくれた胡桃もちという物に対して特に思い入れと心に引っかかっている点がある。初めて食べたのは私が小学校一、二年生の頃、母の里帰りで家族みんなで岩手の母の実家に滞在した時だ。親戚が集まり、伯父が木の臼でもちをつき、つきたてのもちを振る舞ってくれた事があり子供達も順に杵でもちをついたのは良い思い出だ。私は埼玉でも当時

は子供会の正月行事等でつきたてのもちを食べた事はあったが、のりで巻いたり、きな粉と砂糖をまぶしたり、大根おろしで和えたり等の食べ方しか知らなかった。この岩手でのもちつきの際に、生まれて初めて胡桃を用いて作った胡桃あんで和えた祖母の手作りの胡桃もちを食べたのだ。それは衝撃的なうまさだった。

もちイコール和のテイストという概念を打ち消した洋菓子のような食べ方があったとは……。このあんは、自然の甘さプラス、コクのあるクリーミーさを含み、そして冬の縁側に差し込む優しいお日様のような、もしくは、冬の暖かい日差しが枯れ葉や枝に染み込んだ木々の匂いがしたのだ。あん作りの工程は、あの固い胡桃の殻を割る作業から始まる訳で、その匂いは胡桃の木のおいであり、殻の匂いであり、あんの匂いであるのだろう。殻を割った中の実は、ほろ苦い薄皮をまとつていながら、擦りこぎで擦り始めると、あつという間に芳しさの中に甘味を感じさせる香りを広げた。歯ごたえを楽しむ為に、ほんの少しの固まりを残しつつ擦っていき、砂糖を加えて……と、残念ながら断片的な記憶を手繰り寄せているだけなので、“そうじゃないよー。”とツツ込みたくなる岩手出身の胡桃もち作りができる方いらつしやつたらごめんなさい。あんのところみ感、そこに水分というかお湯的なものを加えていたのか？それともつきたてのもちを投入することで適度な水分とでんぶん質を含み、丁度良いとろーり感を出していたのか？とにかくべちゃべちゃになっただけじゃない肝心なポイントである事は間違いない。

和えたてのもちを摘まみ食した時の感激は言うまでもないが、その後は“おもちさんちよつとお口の中でクルミくんと遊んでね”という優しい言葉を思い浮

かべながら、ちよつと意地悪な感じで胡桃の固まりの部分がぐちゃぐちゃになり、もちと早く一体化できるように味わいながら咀嚼した事を覚えている。本当においしかった。胡桃クリーミーな鼻息を出しながら食べていたと思う。

岩手から埼玉に胡桃が送られてきた事があり、私は岩手出身で祖母の娘である母は当然できるのだと疑わず、胡桃もちを作ってくれとお願ひした。母はちよつと自信なさげではあったが母自身の子供時代の臆げな記憶を頼りに作ってくれた。そして期待を膨らませ一口食べた瞬間、なぜか悲しいとか切ないといった感情が湧き上がり、戸惑いながら、子供心にも母が作った物と祖母が作った物を比べてはいけない。と思いつつ、とりあえずおいしいと言って食べた。なぜそんな事を感じたのかわからなかった。とにかく母の胡桃もちは、寂しい味がしたことは確かなのだ。時が経ち、私も母と同じように実家から離れた場所です事となり、出産や子育て、孫の誕生等を経験してから、あの時なぜ寂しい味と感じた理由がわかった気がした。私の考えはこうだ。

母は、幼い時に父を亡くし、生家も裕福とは程遠く、その為、中学卒業後は戦後復興期の集団就職の一環で上京し、看護学校を卒業した後、看護婦として働いた。物心ついた頃から当時の苦労話を聞かされ、またか。と思う事も多々あった。しかし、やつとわかったのだ。たつた十五歳で女手一つで母を含め四人の子供を育てていた祖母の元を離れ、右も左もわからない所に一人でやってきて、どんなに心細かっただろう。言葉も環境も違う、今まで自分が持っていた価値観でさえ通用しない事もあっただろう。何よりももっと母親である祖母と一緒にいたかったはずだ。母だって幼い時もあれば中学生の時もあり、母親が恋しい気持ちを持っていたのだ。子供の

時の私はそんな母の気持ちを理解できるはずもなく、言葉で表すこともできなかったが、ただ母の苦勞話が心に残っていて、母が作った胡桃もちから母の寂しさと闘っていた時の気持ちや感情が伝わってきたのだと思う。だから自分が成長して母と重なる経験をし、理解した事を自分の言葉で表すことができるようになるまであの寂しい味を覚えていたのかも知れない。きっと母が母親である祖母に思いを馳せながら母も祖母が作る所を眺め、食べていたのであるう故郷の思い出が詰まった胡桃もちを作った時、母の寂しさに負けないよう頑張っていた頃の年月が凝縮した物が溶け、しみ出して胡桃もちと一体になり、娘である私が口に入れた瞬間に、母の記憶や気持ちまでもが味として伝わったという事なのだと思う。

その後何回か祖母の胡桃もちを食べたが、成長と共に岩手を訪れる事はなくなり、また母が作った物を食べる事もなく今に至るが、改めて胡桃もちが食べたい、という思いが募る。

大切な思い出の味とは、何をどこで誰と、どんな時にどんな状況で食べたかという事が密接に関係していて、これらの条件が全て幸せの元に整った時に生まれるのではないかと思う。

私に思い出の味を残してくれた祖母は、震災前に亡くなったが、震災を知らずに天国に行けた事は祖母にとって幸せな事だったのではないかと思う。生前は何度も沖繩に住む私に手紙を送ってくれた。全て大事にとつてあるが、祖母も相当な苦勞をしていたはずなのにどの手紙にもマイナスな言葉はなく、「ばあちゃんはおかげ様で幸せ」という一文が必ず書いてあり読み返す度に心が浄化される。そんな祖母が育てた母だからこそ、たとえ家族と離れていても寂しさに負けず頑張る事ができたのだと思う。そして母は私に、離れていても空は心と共に一つに繋がっている事

を教えてくれて私を沖繩に送り出してくれた。おかげで私は自分の選んだ自分が生きたい場所でこうして生きている。これからも辛い時、悲しい時、あー無理だー。と思う事があっても、祖母が母へと私へと繋いでくれた胡桃もちの味を思い出し、空を見上げて空は一つである事を確認すればいつも清々しい気持ちになれるそう。自分の子供や孫には、せめてこのエッセイを読んでもらって胡桃もちの事を伝えられればと思うチャッカリ者の私ではあるが、いつかは手作りに挑戦するかも知れない。

そして本当に良かった事は、なぜあの時の胡桃もちだけは寂しい味がしたのか自分なりの答えを見つけ出せた事だ。心に引っかかっていた物はスッキリし、そして今、祖母と母への感謝の気持ちがあふれ出している。

俳句部門

最優秀賞

緑閃光

花木
詩香／85

奨励賞

声許されず
赤い矜持

本村
隆信／86
友利
正／87



*

*

俳句部門

最優秀賞

緑閃光

花木
詩香

異世界の緑風に嬉々と素数蟬

青しぐれ翡翠葛を踊らせむ

二重虹網干す漁夫にそつと下り

海亀や泪滴る星の砂

秋のアコークロー海の緑閃光

俳句部門

奨励賞

声許されず

本村
隆信

暗闇の声許されず灼くるなり

この洞窟ガマに白骨ありて葛の闇

稲妻は空に遊びて基地照らす

空蟬の祈りのかたち解脱かな

少年の尖りてゐたる夏薊

俳句部門

奨励賞

赤い矜持

友利

正

朱線引く地位協定のソーダ水

山原クイナ飛ばぬ矜持の赤い脚^{あし}

白日傘ゆらし唱和の朱唇かな

あかゆらや島は不戦のさらばんじ

赤土は赤土のまま夏^を了る

琉歌部門
奨励賞

あさと愛子／89
久高友隆／90
前原武光／91



*

*

琉歌部門

奨励賞

あさと愛子

あきよあぬ音や 空襲やあらに
栄ける那覇四町 地獄さらみ

黒煙立てて 焼き跡ゆ残ち
見る影ん無さみ 那覇ぬ町ゆ

明きて三月に 慶良間島々ぬ
美ら松ぬ枯りて 命ん枯りて

逃りゆる先ん 塞がりて闇夜
戦場ぬ道や 哀りさらみ

戦世やまたん 目ぬ前うしかきて
肝んふさがりば 平和願ら

琉歌部門

奨励賞

住む人もをらぬ あばら家どやすが
花や咲き誇て 誰ゆ待ちゆが

秋の夕間暮に 群れ飛びゆるサシバ
明日やよそ島に 永の別れ

まれの山原路 おす風もすださ
心はればれと 夢の心地

名護の七曲がり 思ひ出しゆさ昔
山陰の百合の 眺め清らさ

木の根深深と 枝葉広広と
榕樹のことに 肝や持たな

久高 友隆

琉歌部門

奨励賞

前原 武光

春の山原の 萌える若みどり
綾に織りなしゆる 山の錦

我肝ませ内の 春の花心

綾の命花よ 咲かち誇ら

闇路踏み分けて 恋の通ひ路の

露かかるしげさ わ袖濡らち

十五夜月影に 色香サガリ花

朝に散り果てて 花の筵

よも暑さ過れて 涼風に乗やり

舞ひ踊るアケズ 秋の便り

選評

小説部門
詩部
短歌部門
エッセイ部門
俳句部門
琉歌部門

小嶋 洋輔／93
西原 裕美／103
久保まり子／106
小番 達／109
おおしろ建／111
波照間永吉／114

玉代勢 章／97
照屋 理／117

赤星十四三／100

*

*

第五回名桜文学賞選考経過及び選評

【小説部門】

「リアルに書けているからこそ」

小嶋 洋輔

第五回名桜文学賞は、応募期間を二〇二四年九月二日から一〇月二八日までと設定、結果四編の小説作品が寄せられた。その小説作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞一編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員…赤星十四三（作家）、玉代勢章（作家）、小嶋洋輔（名桜大学教授）

・四編の小説を選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・一月二二日（日）に沖縄県市町村自治会館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞一編、とした。

昨年度の応募数も減少していたが、今年度はさらに少ない四編ということだった。その上応募作の枚数を見ると規定よりも少ないものが多い。また、本文学賞の特徴をもう少し打ち出し、県内他文学賞とのすみわけについて考える時期に来ているのかもしれない。

ただ、今回の応募作は粒ぞろいであった。とくに今回最優秀賞、奨励賞となった二作は、他文学賞に応募していたとしても受賞の可能性が高い作品である。技術的な面から見ても、内容の面白さという面から見てもすぐれた作品であった。選考委員会ではこの二作が順当に選ばれたが、どちらを最優秀賞にするかということで少し議論になった。

最優秀賞「杣道を行く」は、中年独身男性北村道雄を主人公に、既成のどの作品とも違った角度から「現代沖縄」を描いた作品といえる。道雄は地元の新聞社の営業職で、新聞社員でありながら「記事」「取材」に携われない。道雄のような存在を描くことで、「沖縄」における就職氷河期世代が置かれた「悲しさ」のようなものをうまく描いている。選考委員である私もこの世代でもあるため、道雄に共感しながら読み進めることができた。そしてこの世代が今まさに直面しているのが、家族の介護であり、そうした現代的な問題も取り込まれ描かれている。

もう一点この作品の特徴を上げるならば、「格調高い」文章である。比喩も多用され、応募者の技術の高さがうかがえた。そうした文体自体が、正当に評価されないが能力の高い主人公道雄の比喩のようになっていて、それも面白く感じた。

兎角、本作品の優れた点この北村道雄という人物が深く描けたということに尽きる。一人の生きた人間を読者の前に現前させることに成功している。

最優秀賞であるので、あまりマイナスのところは書きたくないのだが、本賞がほかの文学賞のステツプにもなっている状況であるため、いくつか指摘しておきたいと思う。今作品の利点として述べさせていただいた点が、そのまま本作品のマイナス部分となっていたということができる。就職氷河期世代のリアルを描いたとすると、時代遅れの学生運動に参加したという経歴や、その親世代が戦争を体験しているという記述は気になる。道雄はもう少し上の世代なのではないかと見えてしまうのである。また、舞台も「沖縄」であるのだが、道雄の原風景として「田んぼの畦道」を置くことにも異論が出された。こうした時代を切る作品であればこそ、そうした細部も検討すべきと思う。そして「格調高い」文章という利点も、難読漢字にルビがふられないことにより、単純に読みにくくなってしまったところがある。難読漢字を使用することが悪いわけではない。先にも述べたように、主人公自体の比喻として読み取ることもできる。しかし、第一番目の読者となる選考委員の読書行為を阻害するようであっては、それはマイナスになってしまう。

奨励賞は「つきのはな」である。過去のようでもあり架空のようでもある、そうした共同体の中で生きる「私」という女性が主人公である。その共同体には女性が生理の際に隔離される「忌屋」という場所があり、不妊に悩む「私」は毎月「忌屋」に赴くことに強いストレスを感じている。そんななか「私」は「忌屋」で華子という「地獄の共有者」を得る。「私」は「華子」に対して、単なる生理周期が合うといった共感だけではなく、もっと深い濃密な同性愛的ともいえる感覚を抱いているようである。

女性の置かれた位置を身体的な「穢れ」の問題に集約する本作品であるが、それが比喩的に現

代社会における女性の生き難さを描いているともいえる。淡々とした一人称の語りも「私」の孤独をうまく表していて高く評価された。

だからこそ「私」の自裁という結末をどう評価するかが問題となった。それはなぜその結末を「私」が選んだのか、そのリアリティを問題視してのものではない。そこに至る心中の揺れ動きをもう少し枚数を費やして書いてもよかったのではないか、ということである。その悲劇的な結末を新聞記事のようなかたちで記すことも問題視された。「私」にはもつと足掻いてほしかった。そうでなければ男性優位のこの社会を穿つことはできないのではないだろうか。

(こじま ようすけ／名城大学国際学部 教授)

【小説部門】

力作二編 社会人と大学生

玉代勢 章

☆名桜文学賞「杣道を行く」平良政勝（社会人）

主人公は中年の道雄である。道雄は新聞社の営業部門で働いている。編集部門で記者になりた
いが、かなえられない。新聞取次店を相手に購読者の減少を食い止めるために神経をすりへら
して働いている。職場では上司に押さえつけられている。結婚したくてなんにんか女性と会ったが、
ことごとく拒まれる。

劣等感とあきらめは読者の胸を打つ。労働者の生きる哀しみを描く力作だ。

作者にいくつか注文がある。

例えば難解な漢字が多すぎる。題名の「杣」を読めるひとは少ない。「只管」を読めるひとは
ほとんどいない。「須く」も読みにくいし現代では意味も通じない。

作者の思いは読者と共有する易しい漢字と分かりやすいことばで表現するほうが伝わる。大切
なことは力まないことだ。

☆奨励賞「つきのほな」我如古莉子（大学生）

女性が月経のあいだ、嫌悪され隔離されて忌屋いみやに閉じ込められる物語だ。倉橋由美子の小説「パルタイ」（一九六〇年芥川賞候補作）を思わせるような一けたるい、鬱屈した、さわれれば怒りが爆発する——実存主義の、乾いたタッチで描いた力作だ。しびれた。

物語の時間は現代だが数百年前の村を題材にした民話のおもむきがある。我如古は子どもを産む道具としての、劣った、けがわらしい性として女を蔑む社会に抗議する。妊娠や出産にそそぐ男社会の期待に抗議する。

我如古は二十一歳だ。私は我如古の若さと才覚を讃える。

ただ終章が村の掟に同調する設定——忌屋で知り合った女性が結婚し妊娠したことを喜び祝う——になっている。物語の前半、中盤、後半の、抗議する姿勢を妥協せずに貫くべきだ。

☆「輪廻」（社会人）

母、妻、子のいる圭介が主人公である。かずかずの性犯罪を実行し、ついに官憲に捕まり、服役する。出所後、ひとり山奥に住み、自給自足の生活を送る。心を入れ替えて世の中のために働こうと決意する物語である。

一、あわただしく早送りで七、八年の歩みを読まされたという印象だ。二、言葉が薄く軽く重みがない。三、性犯罪が被害者に及ぼす深刻で重大な意味、加害者・圭介の犯罪動機・背景・後悔・苦悩・煩悶が描かれていない。だから山奥での心の入れ替えも社会のために働こうという決

意も真実味が伝わらない。

☆「帰郷の影」(大学生)

一樹と佳織の行動によつて森に棲むマジムンが退治される。以後、島人の恐怖と不安が消え、奇妙な失踪事件も起こらない。島の自然はさらに豊かになり島人の生活も潤うという物語だ。

一、マジムンの具体的な詳しい描写がないので島人に与える恐怖も不安も実感が湧かない。二、失踪事件の実態も書いてないので奇妙さが伝わらない。三、時間の設定枠が長すぎて話が薄く散っている。一週間とか二週間とか短く限るとよい。そうすれば緊張感と迫力が出て濃い重厚な小説になる。四、できごとや舞台を二つ三つに絞つて、いろいろな角度から具体的に深く詳しく書くとうい。

(たまよせ あきら／小説家・文芸評論家)

【小説部門】

基本は文章力

赤星 十四三

今回から名桜文学賞の審査員をさせていた、だくことになった。このオファーを受けたとき、身の引き締まる思いがした。これから世に出ようと意気込む若者（年配の方も少なくないけれど）の才能を見極め、きちんと選ばなくてはならない。私に理解できない小説の申し子が現れる可能性だってある。ちつともわからない作品を他の審査員が絶賛し、私一人蚊帳の外という光景を思い浮かべてぞっとした。さらにはその申し子と授賞式で出くわし、「赤星さんは誰に影響を受けましたか？ わたしはフリオ・コルタサルとかフラナリー・オコナーとかトマス・ピンチオンですけど」などと詰められ、未読なので苦笑いでごまかし、冷たい視線を送られるのだ。だけどそれが何だ。才能の誕生に立ち会いたい。ドキドキしながら応募原稿の封筒を開けた。

今回は四作品の応募があった。まずは最優秀賞の「柚道を行く」についてだが、この作品からは書き手の切実さが伝わってきた。吐き出したことがあり、これを書かずにはおられないといった姿勢が文章からにじみ出ている。新聞社の営業と販売店のスタッフとのやり取りなど、リアリティがあつて興味深く読めた。また基本かもしれないが、規定枚数に一番近いのがこの作品だっ

た（原稿用紙換算四七枚）。規定枚数を満たしたほうが作品に厚みが出ると思う。

ただ、欠点も多く見られた。書きたい気持ちが強すぎて、主語と述語がつながっていない文章が散見された。小説は文章で成り立つ芸術（大げさかな）なので、文章にもっとこだわってほしい。説教臭さも鼻についた。作者の思想が全面的に出ると、エッセイや論文になってしまう。バランスが大事なのだ。あと、難読漢字に閉口した。学術的な雰囲気を出したかったのだろうか。ではなぜこの作品が最優秀作かと言えば、書き手の可能性に賭けたからだ。文章は訓練すればうまくなるし、今後、何作か書けば伸びるだろう。だから、最優秀作をとってゴールとするのではなく、己に足りない部分を見つめるためのスタートとしてほしい。

次に奨励賞の「つきのはな」について述べたい。四作品の中で一番文章がしっかりしていて、すでに独自の世界観を持っている。椎名林檎が小説を書いたらこんな風になるかもしれない。言葉を慎重に選びながら書き進めていると思った。「青い血をもつ生物」といった表現も私は好きだ。読み手の想像力を喚起させることに長けていた。

完成度は高いのだけれど、「仙道に行く」と比べると、書く切実さにやや欠けていたように思う。改行後に一マス下げしていないのはなぜだろう。若い書き手なので、次作に期待したい。

「帰郷の影」は読み始めたとき、わくわくした。作品のつかみがミステリのように、今後の展開に期待した。風呂敷を広げるのが得意なタイプで、読み手の好奇心をくすぐるのがうまい。しかし展開がいまいちだった。こういった作品を書くのであれば、読み手の想像を少しでも超えてほしいかった。また、規定枚数ギリギリで、サブタイトルと一行空けて枚数を水増ししているような

気がした。まず五十枚を書く体力をつけよう。

最後に「輪廻」だが、タイトルと作品の自身が一致していない。作品の内容に当てはまるタイトルをつけた方がいいと思う。また、キャラクターの造形にブレがあった。作品の展開も行き当たりばったりのような感じ。この書き手の場合、先にプロットを作ってから書き始めたほうが良いのではないか。今後に期待したい。

四作品のいずれも文章に気になる点が見られた。小説の基本は文章なので、細心の注意を払って作品を生み出そう。それは私にも言えることなので、自戒でもある。

(あかほし としぞう／小説家)

【詩部門】

詩部門選考について

西原 裕美

今回は詩部門に七作品の応募があった。昨年から引き続き思っていることだが、事実に関連するものをどのように詩で描くのかは難しい。事実を軽視するものになってはいけないうし、一方で、事実をただ記載するだけでは説明的になりすぎる。事実に関連するものを詩として成立させるには、その事実に対する真摯な姿勢や、その事実から生じる情景や心の細やかな揺れまで丁寧に向き合う姿勢が必要だろう。さらにそれを詩として成立させる技術も要することを考えると、安易にはできないのではないだろうか。

今回は最優秀賞を選出することが出来なかった。最優秀を選んだ方が良いのではないかという選考委員もいたが、どの作品も一長一短あり選ぶことは困難だと考えた。

奨励賞「アルル」二藤瑠花は、作品を読んだ時に沖繩の現状を思わせる内容だが、「アルル」という題名は何を意図しているのだろうかという疑問があった。調べてみると南プロバンスの町、もしくは人類の創造と繁栄の女神であることが分かった。ただし作品の中で、「なんだか、異国

みたいですね」という一文があり、前者を意味している方が可能性としては高いのではないかと思う。ゴッホが描いた美しいまちと沖繩を重ね合わせているのだろうか。それとも「アルル」という町の状況を描いたのだろうか。もしそうだとしたら、表現が日本的すぎる。とにかく書き手の中では何らかの繋がりがあるのだろうか、そこが見えづらかった。ただし、3ページという短いページ数の中で、バスの中で何らかのやり取りを最後まで表現し切っているところは評価できるのではないかと思う。ただし、会話の場面なのか、電話の場面なのか、いまいち前後が掴みづらい。ただし印象に残った。

奨励賞「芭蕉布のうた」室園美音は、選考委員二名が高い評価をしていた。特に前半は芭蕉の景色が美しい。ただし、やや説明的でインパクトに欠けるような気がしてしまう。もう少し表現方法や、一編の中で強調したい方向性や強弱のようなものが明確になってくると、非常に際立って印象的な作品になったのかもしれないと可能性も強く感じる。

奨励賞「うめる」外田さしは、選考委員の心を打つ作品だった。非常にインパクトもあり、印象的である。ただし、最後の方の「早産した子を捨てた：」で続く説明が長すぎるのではないかという指摘があった。大幅に削ることを検討した方がいいという意見もあり、それに私も賛同する。

奨励賞「雨、上がる」南野すみれは視点が豊かだ。タイトルから始まり、渦や、雫など、水を思わせる表現が繋がっていく。コミュニケーション上の感覚を、つながりを感じさせる表現で描いている。その面白さが目を引く作品である。

惜しくも入賞は逃したものの、「夜のカメおばあ」も最終選考に残っていた。

名桜文学賞の選考をしてほとんど毎年思うが、応募作品でアンソロジーが作れそうだと思う。そのぐらいそれぞれの作品には、書く動機がある。ここまで記載したことは指摘ではあるのだが、もし表現したい何かがあるのであれば、あまり気にせず信じて表現してみてほしい。私の指摘など意味のないぐらい、誰かの心に残り続ける作品が出来上がるかもしれないのだから。

(にしはら ゆみ／詩人)

【短歌部門】

久保 まり子

短歌作品を読むのは、静かな名護湾の海面に石を投げるのに似ていると個人的に思っています。水面に石を投げると波紋ができますよね。素晴らしい短歌と出会うと、水切りのように幾つもの波紋が続いて心の中に広がっていきます。今回、第五回名桜大学文学賞の短歌部門には二十八名の方々から応募があり読ませていただき、さざなみから大波まで味わった気分です。審査では三名の審査員がまずそれぞれにタイトルと作品を読み順位をつけ、合議にて最優秀賞、優秀賞を決めました。決めたあとに作者の年齢性別を頂戴しました。十五歳から八十五歳まで幅広い年齢の方からの応募があったと知り、短歌という定型詩が全年代に愛されていることを改めて感じました。

まず最優秀賞「くすむ青」五首をご紹介します。

人質のつもりで借りている本の手触りがよすぎて頼りない
泣き方を忘れてられるからできるだけドライブは遠くを目指す
頼んでもないのに2年前からの笑顔がスライドショーで流れる
音として聞いてた歌が声として届いてすべて僕宛だった
描きかけの空を甦らせたくて塗れば塗り足すほどくすむ青

一首目、手放したくない、でも返す気はある本を「人質」と呼び、「頼りない」触感を通して相手との関係性を表現していると読みました。二首目は二、三、四句目におよぶ句またがり、大きな悲しみを心に秘めた、弱さの自覚と、それでも前向きでいたい、行動的でありたいという意思を示した結句につながるように読めました。三首目は視させられるものに揺らされる心が描かれています。スライドショーで笑顔が流れるのを見ている作歌主体は「頼んでもないのに」と、ご自身は笑顔にならないのでしょうか。四首目は聴覚、聞き流していた歌が突然、自分宛のメッセージとして受け取れる内容の声に変化した新鮮な驚き、その圧倒的な感覚が「すべて」という一語に集約されています。五首目は作品タイトルになった歌、手を加えれば加えるほど、思い描いた空とはかけ離れていってしまう悔しさを美しく表現しています。私自身、短歌を詠むときに推敲すればするほどダメになっていく経験をししばしています。そのような体験を想起させられながらも決して不快ではなく、魅力的な美しさのある歌です。五首いずれも平易な口語を用いながら、場面や題材、言葉の選択に現代的な独自性があり、率直なまなざしと受け止める心の複雑さと寂しさが感じられました。

優秀賞となった「並行世界」は歴史理解を背景に、過去と現在とのパラレルワールドを表現した力作です。一首引きます。

大度浜船の漂着霧越しに 万次郎の姿見え隠れす

この「万次郎」とは、ジョン万次郎。彼が米国から帰国した上陸地である大度浜での心象風景を詠んだ歌です。高く評価する声もありましたが惜しくも優秀賞となりました。同じく優秀賞となった「生きる。」には異論もありましたが若い感性で日常をとらえ、主体と客観のズレやアンビバレントな感情に表現の工夫がされており、「勇み立つ子ら」は世代を越えて伝えたいものを確かな言葉で未来に向けて表現されているように読みました。

与えられた文字数が尽きてしまいました。受賞作以外にも若い方と思われる鮮烈な歌、人生の先輩によると思われる熟達の短歌作品との出会いがありました。平易な日常を記録する歌もあれば、情景と共に深い思いを言語化する歌もあり、短歌の限界に挑戦するかのような実験作もありました。文芸とは芸術であり、自己の衝動を表現するアートとしてこの短詩型が選ばれることに感動しました。応募された方々には、ぜひ今後も短歌を作り続けていたいただきたいと願いつつ、新たな作者との出会いも楽しみにいたします。

（くぼ まりこ／歌人）

【エッセイ部門】

小番 達

今回のエッセイ部門には七作品の応募があり、最優秀賞と奨励賞を一作品ずつ選出した。前回の選評の中で述べたことの繰り返しとなるが、エッセイに求められるものの中には、日々の生活の中にあつて多くの人が見逃してしまうような出来事、事物に注目する「観察力」、そこから自身の思いや考えを展開、派生、深化させていく「思考力」、そして、その思いや考えを読者にわかりやすく伝える「文章力」があると私は考えている。

この三つの力を兼ね備えていたのが、最優秀賞の「言葉の前にあるもの」であり、今回の応募作の中で群を抜く作品であつた。この作品は、乳児との間に言葉に依らないコミュニケーションが存在することに気づく母親の視点で語られる。我が子の僅かな仕草を捉えて一喜一憂しながらも、深い愛情をもつて接し、健やかな成長を願う母親の思いが、時にユーモアのある表現も織り交ぜながら小気味よい筆致で綴られている。また、書き出しに「はじめに言葉ありき……」という聖書のヨハネによる福音書の冒頭の一節を置いたことも効果的だった。何か深遠な内容がこの後展開されるのか思いつつ読み進めると、よい意味で裏切られるとともにタイトルの意味が得心できる仕掛けとなつている。瑣末なことながら文中に不要と思われる一行空きの部分があつたことが少し気になつたが、エッセイとして完成度の高い、最優秀賞にふさわしい作品である。

次に奨励賞を受賞した作品は「胡桃もちが教えてくれたこと」である。この作品は、幼い頃の

筆者が母方の祖母に作ってもらった胡桃餅のおいしさに感銘を受けた思い出や後に母が作ってくれた胡桃餅の味から母の人生を筆者が振り返り思い遣るといった内容が叙述される。味覚を介して祖母、母、そして娘（筆者）の三世代が結び付けられ、特に母の人生を想起させるきっかけになっているという点が評価できた。ただし、中学卒業後に親元を離れて苦労を重ねた母の人生とも繋がる、肝心の胡桃餅の「寂しい味」をめぐる部分が十分に書き切れていないように思った。かつて母の胡桃餅が「寂しい味」と感じたものの、その理由がわからずにいた。しかし、今それがわかるようになったという。母の苦労や孤独感といったものを理解できるようになったのは、これまで人生を歩んできた筆者自身が変化したためではなからうか。そうだとすれば、その変化のありようを筆者のこれまでの経験を踏まえて具体的に記述してもよかったように思う。また、誤字・脱字、わかりにくい表現が複数あったことが気になった。推敲・校正は繰り返し行ってもらいたい。受賞者のお二方、また惜しくも選外となった応募者の方々の今後の執筆に大きな期待を寄せている。これからも多くの文章を読み、多くの文章を書いていただき、そしてまた本文学賞へ応募していただければと思う。

（こつがい とおる／名桜大学国際学部 教授）

【俳句部門】

おおしろ 建

俳句部門の応募は六作品であった。数は少なかったが、それぞれ読み応えがあった。俳句部門は五句で一作品の応募。五句をまとめたタイトルを付けることになっている。審査は久保まりこ氏、西原裕美氏、私の三人で行った。審査は作者の名前を伏せて行った。選考は各審査員がそれぞれ、一位から三位までを推薦する。挙がった作品を論議した。

最優秀賞「緑閃光」の花木詩香さんは第四回で奨励賞を受賞している。奨励賞の「声許されず」の本村隆信さんも前回、奨励賞であった。今後も応募して欲しい方です。最期まで賞の争いに残っていたのが「夏のひととき」の森沢ナツさんであった。審査後に応募受付を見ると高校生であった。これからの活躍が期待できる作品であった。前回の応募が十八作品であったので、今回は応募数が減って残念である。もっと応募が増えるのを期待したい。

最優秀賞「緑閃光」花木 詩香（はなき しいか）

《秋のアコークロー海の緑閃光》。破調の句。「アコークロー」は沖縄の方言で「夕暮れ時」のこと。秋の夕暮れ時、沈む太陽が水辺線からわずかに出ている直後に、太陽の上の弧が、緑色の光りに輝いたという。幻想的な瞬間であり、太陽の命の鼓動を感じたのであろう。

《異世界の緑風に嬉々と素数蝉》。「素数蝉」は北米固有の蝉で十三年ごとに大量発生する「一三

年蟬」と十七年ごとの「十七年蟬」がある。十三年ぶりや十七年ぶりに地上に出た蟬。そこは「異世界」と感じるのだろう。木々を吹き抜ける風に、生きている喜びの声を上げるのである。

《海亀や泪滴る星の砂》。卵を産むため陸に上がった海亀は泪をながす。輝く泪は滴り落ちて星の砂となる。亀の泪が累々と積もる海岸。八重山にある星砂の海岸は、こうして出来上がったのだという伝説を生み出したかのような作品である。読む人の空想を刺激する句である。

《青しぐれ翡翠葛を踊らせむ》。ヒスイの様な花びらを幾重に並べ房状に垂れ下がった翡翠葛（ヒスイカズラ）。青葉から滴り落ちる雨がヒスイカズラをゆらせ踊らす、幻想的な情景だ。

奨励賞「声許されず」本村 隆信（もとむら たかのぶ）

《稲妻は空に遊びて基地照らす》。稲妻は自由奔放に空を切り裂き踊る。その様を「空に遊びて」と捉える。沖繩に傍若無人に広がる基地に降り注ぐように照らす。米軍基地も自衛隊の基地も戦争を前提に存在する。作者の意識に基地を否定する気持があるのを感じる。

《空蟬の祈りのかたち解脱かな》。蟬の幼虫は数年かかって成虫になる。地上に出た蟬は殻を割って飛び立つが数日で死んでしまう。束の間の生を謳歌する。そんな蟬の抜け殻である空蟬に救いを求めたのであろうか。「祈りのかたち」「解脱」を見いだしている。

《少年の尖りてゐたる夏薊》。若い頃は突っ張っており、すぐに突つかかる。「尖りて」ばかりである。薊の葉には棘がある。「少年の尖り」は夏薊のように棘ばかりで触ると痛い。薊の花言葉に「厳格」「高潔」などがあるが、「触れないで」「人間嫌い」などもあるようだ。

奨励賞「赤い矜恃」友利 正（ともしり ただし）

《山原クイナ飛ばぬ矜恃の赤い脚》。山原クイナは鳥なのに飛べない。地上を走り回るばかりである。しかし山原クイナは飛ばないのが俺の「矜恃」だと言う。走り回るための立派な「赤い脚」があるのだと言い切る。人間だつて様々なタイプがあつてもいいのだと主張しているのか。

《朱線引く地位協定のソーダ水》。日米間の「地位協定」は特に沖縄にとつて不平等なものである。それはまるで「朱線」を引いて、ここから先は侵入禁止ですよと言つているようなものだという。そんな「地位協定」は「ソーダ水」の泡のようにすぐに消え無意味だとする。

《あかゆらや島は不戦のさらばんじ》。「あかゆら」は八重山では「デイゴ」のこと。「さらばんじ」とは沖縄の方言で「絶頂期・最盛期」の意味のようだ。デイゴが真っ赤に咲いているように、島は不戦を唱える、今その絶頂期だと主張する。南西諸島への自衛隊配備に反対の句か。

（おおしろ けん／俳人）

【琉歌部門】

波照間 永吉

今年は、例年になく応募者が少なく、寂しい限りであった。他の琉歌賞の盛況ぶりからみて、名桜文学賞琉歌部門に問題があるのかもしれない。審査員として責任を感じる。どこに問題があるのか。宣伝なのか、審査そのものに魅力を感じられないのか（審査員の力量が問題とされているのか）、あらためてしっかりと考えてみる必要がある。

ただ、今回の受賞者の力量はすでに十分で、その意味で安心して読めたし、その達者ぶりはすぐに分かった。後は、内容だけである。審査のポイントは、私自身がこれらの歌からどのような感動をうけるか、であった。

その観点から見ても、久手堅愛子氏の作品は十・十空襲から始まって、米軍の慶良間上陸、そして沖縄全土でくり広げられた沖縄戦を詠って特異である。特に一首目で十・十空襲で那覇の街が焼き尽くされていく歌では、空襲を知らせるサイレンの音、そして炸裂する爆弾や機銃の音までが聞こえるようである。この歌をうけて二首目では、空襲の後にくすぶる煙の立ち上る那覇の街が詠われる。これも映像を立ち上げらせる歌である。そして、翌年三月の米軍の慶良間上陸による沖縄戦となるのだが、三首目は「明きて三月に^{アサシツチ}」と時間と場面の展開を初句で打ち出し、慶良間での凄惨な「集団自決」による生命の断絶を、緑なす松の枯死と重ねて表現していく。常磐木の松が爆弾を受けて枯れきっている姿と慶良間の人々の凄惨な死が沖縄戦の象徴として詠われて

いる。四首目と五首目は前の三首に比べるとやや平凡になっているが、作者の平和への祈りは十分に伝わってくる。

久高友隆氏の作品は、「山原紀行」とでも名づけられるかもしれないが、一首目は過疎の村に咲く花に焦点があり、二首目は南へ下っていくサシバとの一期一会が詠われる。三首目で、訪れた山原の風土に包まれる快さを「夢の心地」と詠っているのが印象的である。四首目は、今は姿を消し去ったが、かつてヤンバルへ近づいたことを知らせた名護の七曲がりとその野辺に咲き乱れていた百合の花が詠われて、懐かしさを呼び起こす。五首目はヤンバルに限定はされないだろうが、ガジュマルの力強さにあやかうとの心意を詠うものである。ただ、よく分かる故に月並みな琉歌作品となった印象である。

前原武光氏はよく琉歌をよみなし、力量豊かな人である。ただ、上手故というか、詠みなれている故というか、私の中で、これは！ という驚き・感動がいま一つ湧き起こらなかったのは惜しいことであった。5首の中ではサガリ花を詠った四首目が、サガリ花の色香をテーマに、花の持つ夜の妖艶と朝の儂さを対比しながら、散ってなお美しい姿を「花の筵」と見立てて面白い。ここにこの作者の確かな力量が感じられた。一首目・二首目が春、三首目と四首目が夏、五首目が秋と、沖縄の四季の景物を取り上げている。さて冬はどう詠われるのだろうかと興味をもったのだが、これは次回以降に期待したい。

以上、3人の作者の歌を受賞作に選んだが、残念ながら、そのいずれかを最優秀賞とすることは躊躇された。私の感受性へ強いインパクトを与える力が弱いように思われたのだ。

応募作者2番目と4番目の方の作品については、字余りや句内の音数配分（8音句の構成は5・3音、3・5音。6音句の構成は3・3音を原則とする）などに難があり、また、琉球語の使用という原則からはずれた部分がある。琉歌（短歌）は8・8・8・6音で一首を構成する形式の歌であるという基本を踏まえ、そして琉球語によつて、多くの歌を詠んでくださることを期待したい。

（はてるま えいきち／名桜大学大学院国際文化研究科博士後期課程 教授）

【琉歌部門】

照屋 理

琉歌部門は今年度、五件（十三首）のご投稿をいただき、最優秀一作品、奨励賞二作品が選出された。以下に作品と選評結果を示す（本文、ルビは投稿原稿通りに表記した）。

・二〇二四年度最優秀作品（五首一組）

あきよあぬ音や 空襲やあらに 栄ける那覇四町 地獄さらみ
クルキツ クワシユウ ナファユマチ チヅク
 黒煙立てて 焼き跡ゆ残ち 見る影ん無さみ 那覇ぬ町ゆ
クワシユウ ヤ ア ミ ナファ マチ
サンマ キラマシマ ミ チユ マチ カ
 明きて三月に 慶良間島々ぬ 美ら松ぬ枯りて 命ん枯りて
ミ フサ ヤミ ミチ スチ カ
ミチ サチ ミ チ ミチ ア ミ
 逃りゆる先ん 塞がりて闇夜 戦場ぬ道や 哀りさらみ
ミチ サチ ミ チ ミチ ア ミ
 戦世やまたん 目ぬ前うしかきて 肝んふさがりば 平和願ら
ミチ サチ ミ チ ミチ ア ミ

本作品は、いわゆる十十空襲にまみえた那覇の様子から始まり、再びきな臭い時代が身近に迫っていることを悲しむ。いずれの歌も、経験した者しか分からないような戦場の現実を以て読者へ迫ってくるようであり、実体験を伝えているように感じられる。いまだ世界で戦火は止まず、作者とともに平和を乞い求める気持ちにかられる。

・二〇二四年度奨励賞作品（五首一組）

住む人もをらぬ あばら家だやすが 花や咲き誇て 誰ゆ待ちゆが
 秋の夕間暮に 群れ飛びゆるサシバ 明日やよそ島に 永の別れ
 まれの山原路 おす風もすださ 心はればれと 夢の心地
 名護の七曲がり 思ひ出しゆき昔 山陰の百合の 眺め清らさ
 木の根深深と 枝葉広広と 榕樹のごとに 肝や持たな

中南部から名護市へ向かうと左手に名護浦、右手に山々が連なる雄大な光景が広がっている。その海岸線に沿った道筋は幾重にも曲がりくねり、かつて「名護の七曲がり」と称された。五、六月には山間にテッポウユリが凜とした姿を見せ、さらに市内へ進むとヒンプンガジュマルが出迎えてくれる。名護への旅路が詠み手の爽やかな心情に乗って伝わってくる。

・二〇二四年度奨励賞作品（五首一組）

春の山原の 萌える若みどり 綾に織りなしゆる 山の錦
 我肝ませ内の 春の花心 綾の命花よ 咲かち誇ら
 闇路踏み分けて 恋の通ひ路の 露かかてしげさ わ袖濡らち
 十五夜月影に 色香サガリ花 朝に散り果てて 花の筵
 よも暑さ過れて 涼風に乗り 舞ひ踊るアケズ 秋の便り

本作品も五首一組で、春から夏、夏から秋への季節の移り変わりが一連となった作品となっている。いずれの歌も古格をまとった美しい表現が散りばめられている。特にサガリバナを詠み込んだ四首目は、十五夜の月影に映えるサガリバナと、夜が明け落花してしまった後も、その艶やかさを今度は地上から発している情景が、それぞれ絵のように浮かんでくる。

以上が、上位三首の評である。

今回、投稿数が少なかったが、チャレンジングな内容も見受けられるなど、興味深い作品は多かった。改めてご投稿されたい。そして前回同様、若手の皆さんによる投稿を心より期待している。

(てるや まこと／名城大学国際学部 教授)

第五回（令和六年度） 名桜文学賞表彰式を開催

令和七年三月一日（土）、本学附属図書館東江康治記念講堂において、第五回（令和六年度）名桜文学賞表彰式を開催しました。

「名桜文学賞」は第十五回まで続いていた「名桜大学懸賞作品コンクール」を名称変更（衣替え）し、第五回目を迎える今回は六部門（小説、詩、短歌、エッセイ、俳句、琉歌）で応募総数五七編の作品が寄せられ、その中から厳正な審査の結果、各部門の受賞作（最優秀賞：四作品、奨励賞：一四作品）が選ばれました。

表彰式当日は、受賞者をはじめとする関係者を含め、約三〇人が参加しました。

表彰式に先立ち小番達館長から開会の挨拶があり、次に出席した審査員全員から講評が

行われました。その後、参加した受賞者一人ひとりに賞状及び副賞を授与しました。

また、表彰式終了後には審査員と受賞者が意見交換等を行う場面も見られ、新たな文学の可能性を模索する場となりました。

今後も名桜文学賞は、文学の発展と才能の発掘に努め、さらなる創造と交流の場として発展していくことを目指してまいります。ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



名桜文学賞表彰式を終えて。参加者一同

第五回名桜文学賞受賞作品集

(名桜大学附属図書館報 特別号 令和六年度)

発行日

令和七年三月三十一日

編集 名桜大学附属図書館

発行 公立大学法人名桜大学

〒九〇五-1858

沖縄県名護市字為又1-2-1

印刷

株式会社 国際印刷

名桜大学附属図書館報 特別号 令和6年度

